

長野遺跡群

西町遺跡

——国道406号(若松町)道路改良事業地点——

1998. 3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない貴重な国民的財産であると考えます。

歴史は単なる時間の流れの集積ではなく、私たちの先祖の長い間の知恵と文化の集積であります。特に埋蔵文化財は先人たちの文化を伝えるだけでなく、現代文化の在り方を見つめ直す上でも鍵となる一級の資料を内在しているものと考えます。

このたび、国道406号（若松町）道路改良事業ならびに中央通り歩道改修事業に伴い長野遺跡群西町遺跡の発掘調査・工事立会を実施いたしました。

事業予定地周辺は善光寺の門前町にあたり、善光寺史研究上注目されている地域であります。古代から現代に至る関連遺構が重層的に発見されるものと期待されましたが、度重なる火災や戦禍による整地および基盤層まで浅いため後世の重複する搅乱により予想どおりの成果を得られませんでした。しかし、古代・中世以前に縄文・弥生・古墳時代の人々がすでにこの地に生活の基盤をおいていたことが判明するなど数多くの歴史事象を得ることができました。

本書はその成果を要約し、「長野市の埋蔵文化財第87集」として報告するものです。この報告書が地域古代史の解明や文化財保護の一助として、関係各方面に広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後に発掘調査から報告書刊行にいたるまで公私にわたり多大なご指導・ご援助を賜りました関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成10年3月

長野市教育委員会
教育長 滝澤 忠男

例　　言

- 1 本書は、長野県土木部長野建設事務所を事業主体とする「国道406号（若松町）道路改良事業」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。併せて、関連事業「一般県道長野豊野線（中央通り）歩道改修事業」における工事立会報告の概要を記載した。
- 2 発掘調査の実施は、長野県教育委員会の指導による長野建設事務所長と長野市長との契約に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。
- 3 発掘調査地籍は、長野市大字長野若松町字西町1024他および大字長野大門町字大門町520-1他である。遺跡の名称を「長野遺跡群西町遺跡」とした。ちなみに当該遺跡は起因事業に先立って平成6年度に実施した予備調査により確認命名したものである。
- 4 発掘調査期間（現場作業）は次のとおりである。平成7年度は7月24日着手し、平成8年3月15日終了。平成8年度は4月10日着手し、9月20日完了。
- 5 発掘調査対象範囲は、県教育委員会との三者協議により拡幅される新規道路範囲（幅員15m・延長290m）に限定し、既設道路に関しては発掘調査の対象から除外した。
- 6 本書は、発掘調査によって検出された時代比定が可能な中世およびそれ以前の遺構・遺物を中心に掲載した。ただし、近世遺構等は特色あるものを抽出した。
- 7 遺構測量は、平面直角座標第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準として、コードックシステムを採用するため佛写真測図研究所に委託した。
- 8 発掘調査および本書の執筆・図化・版組・編集等の担当者は第Ⅰ章第3節調査の体制を参照されたい。
- 9 陶器類については、市川隆之氏（跡長野県埋蔵文化財センター調査研究員）の教示を受けた。
- 10 遺跡の略号は「NGN」である。
- 11 発掘調査によって得られた諸記録及び出土品は、長野市埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

- 1 遺構図は1:80、土器等の遺物図は1:4、砥石等石製品および磁器製品は1:3、小形各種製品・錢貨等は1:2の縮尺でそれぞれ図化提示した。
- 2 遺構断面図の数値は標高を表す。
- 3 掲載図中に遺構略号を用いた。先頭の文字は調査区を指し、後二文字が遺構を表す。S Bは住居址、S Tは掘建柱建物址、S Kは土坑、S Dは溝址、S Eは井戸址、S Xは竪穴状遺構または性格不明の遺構である。ただし、遺構分布図や写真中に数字のみの記載があるが冠頭のS Kを省略している。
- 4 弥生土器図中赤色塗彩が施されるものには密点アミ掛け、黒色土器には黒色部に粗点アミ掛けで表示した。また、断面が黒塗りのものは須恵器を、アミ掛けのものは陶磁器を表す。
- 5 中世土器観察表備考欄のタナと記載されるものは、底部外面の糸切り痕上に乾燥槽の痕跡と思われる平行条線が付着しているものをいう。
- 6 遺物写真図版中の番号は、遺構毎出土遺物実測図番号または集合遺物実測図番号と一致する。

目 次

序・例言・目次

I 調査経過	1
1 保護協議の経過	1
2 調査の経過	3
3 調査の休制	4
II 長野遺跡群と西町遺跡	5
III 調査概要	8
1 A区の調査概要	9
2 B区の調査概要	14
3 C区の調査概要	18
4 中央通り工事立会の概要	20
IV 遺構と遺物	21
1 繩文時代の遺構と遺物	21
C S B 8	21
B S K 28	21
B S K 29	22
2 弥生時代の遺構と遺物	23
A S B 1	23
B S B 9	25
3 古墳時代の遺構と遺物	26
A S B 10 (古)	26
A S B 11	27
A S B 4	30
A S B 7	31
A S B 10	32
A S B 13	32
A S B 14	34
4 奈良・平安時代の遺構と遺物	35
B S B 8	35
C S B 6	35
B S T 1	36
C S B 3	36
C S B 5	38
5 中世の遺構と遺物	38
A S X 1	39
A S X 4	39
A S X 6	41
A S X 7	42
A S K 2	42
A S K 16	43
A S K 23	44
A S K 24	44
A S K 27	45
A S K 52	45
B S B 7	45
B S K 51	46
A S D 2	47
C S D 1	50
6 近世の遺構と遺物	50
B S X 3	50
B S X 3 北	51
B S K 48	51
B S D 3	52
7 特記遺物	53
石器・石製品	53
布目瓦	55
象牙製品	55
鹿角製品	55
銅製品	56
土製品	56
磁器製品	56
古錢	56
土器・陶磁器観察表	58
V 結語	71

挿 図 目 次

1図	調査位置図	2	4 3図	C S B 6 出土土器実測図	36
2図	道路改良計画図	2	4 4図	C S B 6 実測図	36
3図	調査位置及び主要遺跡分布図	6	4 5図	掘立柱建物址実測図	37
4図	旧地形図および調査地周辺の字界図	7	4 6図	C S B 3 実測図	37
5図	調査地及び遺構分布図	8	4 7図	C S B 3 出土土器実測図	37
6図	A区遺構分布図	9	4 8図	C S B 5 実測図	38
7図	A調査地遺構分布図	10	4 9図	C S B 5 出土土器実測図	38
8図	A調査地遺構分布図	10	5 0図	C S K 5 実測図	38
9図	A調査地 3次面遺構分布図	11	5 1図	C S K 5 出土土器実測図	38
10図	A- 2 調査地遺構分布図	12	5 2図	A S X 1 実測図	39
11図	B区遺構分布図	14	5 3図	A S X 1 出土土器実測図	39
12図	B- 2 調査地遺構分布図	15	5 4図	A S X 4 下面実測図	40
13図	B- 3 調査地遺構分布図(1)	16	5 5図	A S X 4 出土土器実測図	41
14図	B- 3 調査地遺構分布図(2)	16	5 6図	A S X 6 実測図	41
15図	B調査地遺構分布図	17	5 7図	A S X 6 出土土器実測図	41
16図	C区遺構分布図	18	5 8図	A S X 7 実測図	42
17図	五輪塔部材回収数()内	20	5 9図	S X 7 出土土器実測図	42
18図	歩道改修工事掘削断面概念図	20	6 0図	A S K 2 出土土器実測図	42
19図	C S B 8 実測図	21	6 1図	中世土坑実測図	43
20図	C S B 8 出土土器拓影	22	6 2図	A S K 16 出土土器実測図	43
21図	B S K 28- 29 実測図	22	6 3図	A S K 23 出土土器実測図	44
22図	B S K 29 出土土器実測図	22	6 4図	A S K 24 出土土器実測図	44
23図	A S B 1 実測図	23	6 5図	A S K 27 出土土器実測図	45
24図	A S B 1 出土遺物実測図	24	6 6図	A S K 52 出土土器実測図	45
25図	B S B 9 出土遺物実測図	25	6 7図	B S K 51 出土土器実測図	45
26図	B S B 9 出土遺物実測図	25	6 8図	B S B 7 実測図	46
27図	A S B 10- A S B 10 実測図	26	6 9図	B S B 7 出土土器実測図	46
28図	A S B 10 出土土器実測図	26	7 0図	A S D 2 実測図	47
29図	A S B 11 実測図	27	7 1図	A S D 2 出土土器実測図	48
30図	A S B 11 出土土器実測図(1)	28	7 2図	C S D 1 実測図	49
31図	A S B 11 出土土器実測図(2)	29	7 3図	C S D 1 出土土器実測図	50
32図	A S B 4 実測図	30	7 4図	B S X 3 (上)・(北) (下) 実測図	51
33図	A S B 4 出土土器実測図	31	7 5図	B S D 3 実測図	51
34図	A S B 7 実測図	32	7 6図	B S K 48- 49 実測図	53
35図	A S B 7 出土土器実測図	32	7 7図	B S K 49 出土砂鑄型実測図	53
36図	A S B 10 出土土器実測図	32	7 8図	B S D 3 出土土器実測図	53
37図	A S B 13 出土土器実測図	33	7 9図	布目瓦実測図・拓影	53
38図	A S B 13 実測図	34	8 0図	石器・石製品実測図	54
39図	B S B 14 実測図	34	8 1図	石・土・磁器製品実測図	55
40図	B S B 14 出土土器実測図	34	8 2図	象牙・鹿角・銅・土製品実測図	56
41図	B S B 8 実測図	35	8 3図	古錢拓影	57
42図	B S B 8 出土土器実測図	35	8 4図	口径・器高分布図	72

I 調査の経過

1 保護協議の経過

近年、発掘調査成果を通して中世遺構に対する評価が高まり、当市においても善光寺門前町関連遺跡の確認と遺跡範囲の設定など埋蔵文化財保護に関する基礎的な作業の必要性が提起されてきた。これを受けて長野市教育委員会では、善光寺周辺における開発行為には適宜工事立会及び試掘調査を実施し、その内容確認作業をすすめてきた。平成5年度に至り、当該遺跡一帯において国道・県道・都市計画道路の改良建設事業がそれぞれ関連して着工される見通しとなったため、各事業主体機関と協議しながら、事業の進捗に併せて随時埋蔵文化財保護措置を講じることになった。起因事業を含めた一連の道路改良設計概要は次のとおりである。

「国道406号（若松町）」：長野県土木部長野建設事務所、道路改良事業、平成7～9年度施工

「一般県道長野豊野線（中央通り）」：長野県土木部長野建設事務所、歩道改修事業、平成5～8年度施工

「都市計画道路県庁大門町線」：長野市都市開発部都市計画課、道路改良事業、平成6～9年度施工

国道406号（若松町）道路改良事業に係る埋蔵文化財保護に関しては、事業主体である長野建設事務所と文化財保護側の長野県教育委員会及び長野市教育委員会との間で三者協議を行ってきた。その結果、交通状況や商店街への影響等を考慮して道路拡幅部に限定して発掘調査の実施を決定した。また、一般県道長野豊野線（中央通り）歩道改修事業に関しては、掘削工事幅が狭いことと商店の出入口確保等のため工事立会により対応する。

なお、長野市が施工する都市計画道路県庁大門町線道路改良事業に関しても、平成8年4月22日より12月24日まで記録保存のための発掘調査を実施しているが、調査記録については別途報告するものとしたい。

当該事業に係る埋蔵文化財保護協議の経過は次のとおりである。

平成5年10月26日 県教委主催協議：平成6年度当該事業に係る埋蔵文化財保護について協議

6年10月3日 県教委主催協議：平成7年度の当該事業に係る試掘及び発掘調査実施について協議

12月5日 都市計画道路県庁大門町線に係る予備調査（試掘確認調査）実施、遺跡の存在を確認

7年1月13日 国道406号（若松町）に係る予備調査（試掘確認調査）実施、遺跡の存在を確認

1月20日 一般県道長野豊野線（中央通り）平成7年度工事立会計画について協議

3月20日 当該遺跡を含む一帯を「長野遺跡群」と命名、埋蔵文化財包蔵地範囲をあらたに設定

3月22日 一般県道長野豊野線（中央通り）掘削工事に伴い五輪塔部材が出土

3月29日 一般県道長野豊野線（中央通り）に係る工事立会に着手、4月11日終了

5月11日 国道406号（若松町）平成7年度の埋蔵文化財発掘調査計画について協議

7月1日 国道406号（若松町）平成7年度埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結

7月24日 国道406号（若松町）発掘調査を開始、3月15日現場作業を終了

10月13日 県教委主催協議：当該事業に係る平成8年度保護措置を協議

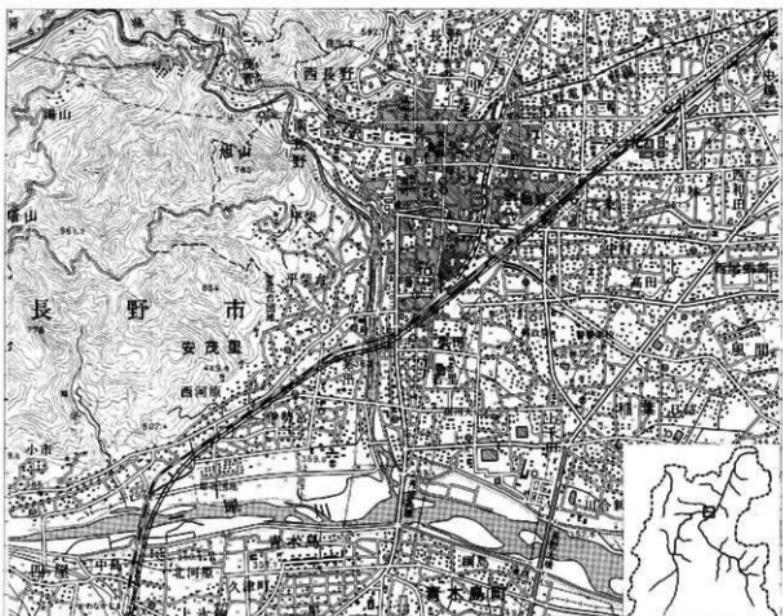
8年1月16日 一般県道長野豊野線（中央通り）工事立会を再開、2月27日終了

4月8日 国道406号（若松町）平成8年度埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結

4月10日 国道406号（若松町）発掘調査を再開、9月20日現場作業を完了

平成9年9月1日 国道406号（若松町）平成9年度埋蔵文化財発掘調査委託契約（報告書作成）を締結

10年3月31日 「長野遺跡群西町遺跡－国道406号（若松町）道路改良事業地点－」を刊行



1図 調査位置図 (1 : 50,000)



2図 道路改良計画図 (1 : 10,000)

2 調査の経過

[国道406号（若松町）平成7年度発掘調査]

- 7月24日 発掘調査現場作業に着手
7月25日 A調査地遺構検出作業に着手
8月9日 中世遺構の記録作業を終了
9月6日 古代遺構の記録作業を終了
9月11日 A-2調査地表土除去開始
9月18日 遺構検出作業に着手
10月5日 A調査地遺構の記録作業を完了
10月16日 C区表土除去開始
10月19日 遺構検出作業に着手
10月24日 A-2調査地遺構の記録作業を完了
11月14日 C地区遺構の記録作業を完了、作業中断
2月14日 現場作業再開、B調査地表土除去開始
2月15日 B調査地遺構検出作業に着手
3月15日 遺構の記録作業を終了
- [国道406号（若松町）平成8年度発掘調査]
- 4月10日 B調査地遺構の検出作業を再開
4月18日 検出遺構の記録作業を完了
6月13日 B-2調査地表土除去作業を開始
6月17日 中・近世遺構の検出作業に着手
7月3日 古代遺構の検出作業に着手
7月5日 中・近世遺構の記録作業終了
8月5日 古代遺構の記録作業を終了
8月6日 B-2調査地表土除去作業を開始
8月19日 B-2調査地東側遺構の検出作業に着手
8月22日 東側検出遺構の記録作業を終了
8月23日 B-2調査地西側遺構の検出作業に着手
8月26日 B-3調査地表土除去作業を開始
8月30日 西側検出遺構の記録作業を終了
9月2日 B-3調査地遺構の検出作業に着手
9月18日 検出遺構の記録作業を終了
9月20日 器機材の撤収をもって現場作業を完了
- [一般県道長野豊野線（中央通り）工事立会]
- 平成6年度事業の東側歩道改修工事に伴う工事立会は、工事工程に従い平成7年3月29日・30日、4月1日・3日・5日・6日・10日・11日の8日間立会を実



I-1 A区（7年8月）



I-2 A区（7年10月）



I-3 C区（7年11月）



I-4 B区（8年7月）

施した。遺構・遺物の埋没状態の記録と掘削に伴って出土した五輪塔部材を中心として遺物の収集にあたった。回収した五輪塔部材は総数370個にのぼった。

平成7年度事業の西側歩道改修工事に伴う工事立会は、平成8年1月16～20日・22～25日の9日間実施した。その後2月6日・8日・9日・13日・14日・16日・17日・20日・27日の9日間にわたって行い、総数380個の五輪塔部材を回収した。



I-5 工事立合

3 調査の体制

長野市における埋蔵文化財の保護行政は、史跡整備や遺跡の保護を目的とする発掘調査については社会教育課が対応し、開発行為に伴う発掘調査・保護協議は埋蔵文化財センターが直轄事業として実施している。

発掘調査主体者 長野市教育委員会教育長 滝澤忠男

総括管理者 埋蔵文化財センター所長 丸田修三

庶務係 主幹兼所長補佐兼庶務係長 小林重夫（契約・出納事務）

事務職員 青木厚子（庶務・出納事務）

調査係 所長補佐兼調査係長 矢口忠良（古代・中近・世遺物実測、報告書編集、IV・V章担当）

主査 青木和明（主任調査員、遺構写真、報告書編集、I～III章担当）

主査 千野 浩（弥生・古墳時代土器実測・浄書、遺物写真・版組）

主事 舟島哲也・風間栄一・小林和子

専門主事 清水 武（遺物復元・整理）

専門員 西沢真弓・藤田隆之（調査員）、堀内健次（調査員、古銭拓本）

専門員 中殿章子・寺島孝典・山田美弥子・小野由美子・永井洋一・小林まゆ佳・勝田智紀・宮川明美

臨時調査員 青木善子（遺構・遺物図浄書）、武藤信子（遺構整図・遺物実測）、矢口栄子（遺物実測・版組）、多羅沢美恵子（石器実測・浄書）

発掘調査作業員 市川とよ子・池田 久・岩崎厚志・岩堂ひとみ・上田千幸・大塚嘉幸・片山喜美子・勝田千亜紀・金子紅実子・北川正恵・北村宣之・倉石光将・神頭幸雄・小島静恵・小林三郎・酒井博子・佐々木慶子・里見千津子・高橋 煉・滝澤智子・塙田光子・寺島和子・長橋章仁・夏目絵子・西尾千枝・西沢 昇・萩野祐子・堀内幸子・松本知子・宮坂智恵子・宮坂洋子・美谷島昇・宮原千治・宮原孝子・宮村智子・宮本真弥・向山純子・山岸香里・山崎洋子・山下大輔・山中雄介・山室やすい・横川甚三・脇坂智子・鷺沢啓子

整理作業員 池田見紀・岡沢治子・小泉ひろ美・塙田容子・徳成奈於子・西尾千枝・松沢ナオエ・倉島敬子・向山純子

測量業務委託 ル写真測図研究所

発掘調査の遂行にあたって区長はじめ地元皆様方、長野県教育委員会文化課、長野建設事務所、川浦土建㈱の関係各位には円滑に調査事業ができるようご配慮を賜った。お礼を申し上げます。

II 長野遺跡群と西町遺跡

善光寺門前町を核として発展してきた長野市は、明治22年町制施行、明治30年市制施行以来、周辺市町村との合併を重ねて今日に至っている。市名に冠せられた「長野」の地名は、もとは小字「上長野・下長野・袖長野」などに見られるように、現在の信州大学教育学部・市立図書館・長門町あたりに限定された小字名に過ぎなかつたが、やがては善光寺門前町一帯、あるいは町場を除く村名として呼び慣わされるようになり、明治期以後は町名・市名・県名へと採用されるに至ったものである。ちなみに、市内現行の大字「長野・南長野・西長野」は、明治22年の町制施行において合併した3町の名称が大字として継承されてきたものである。

大字長野に所在する調査地は、大字南長野・西長野とともに、裾花川段丘と湯福川扇状地による複合地形の上に立地する（以下長野地区と呼ぶ）。砂・礫の堆積物で構成された水はけの良い土壤と、南下りの緩斜面という好適な環境から、善光寺門前町の形成に先駆けて、原始古代を通じて居住域として利用されてきたと想定され、遺跡分布の密度は高い地区と推測してきた。しかし明治期以後、県庁所在地となったことに伴い、門前町に加えて行政機関が集中するなどの市街地化が急速に進行したため、埋蔵文化財保護地の周知に関しては遅れをとつてきた。発掘調査の実施は新渕町遺跡（大字西長野字鐘ヶ瀬）、県町遺跡（大字南長野字型徳）と旭町遺跡（大字長野字堅石）の3遺跡（3図）が数えられるが、長野地区においては個別の遺跡範囲把握はもとよりその分布状態すらも不明確な状況にあった。

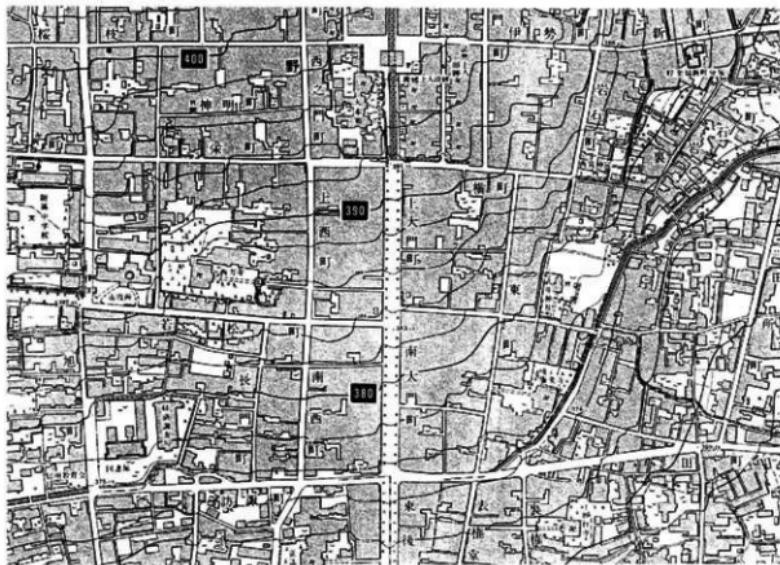
長野市教育委員会では、市内での開発行為等に伴う試掘確認調査の結果に基づいて、平成7年3月に長野市遺跡分布図及び遺跡一覧表を改訂した。「長野遺跡群」の名称は、その際設定したものであり、從来不明確であった長野地区における遺跡分布範囲を面的に把握し、埋蔵文化財保護の対象範囲を明示することを目的としたものであった。また、試掘確認調査により新発見される個別の遺跡も、居住域としての地形的な環境条件を勘案すれば互いに連続して重複存在する可能性も想定されたため、長野地区における裾花川河岸段丘及び湯福川扇状地に展開するであろう複数時代の複数遺跡を包括する概念として遺跡群を設定する必要もあった。さらに一方の課題である、中近世善光寺門前町遺構の保護にも対応することを目指したものであった。



II-1 調査地周辺の航空写真（平成2年、㈱ジャスティック撮影）



3図 調査位置及び主要遺跡分布図 (1:10,000)



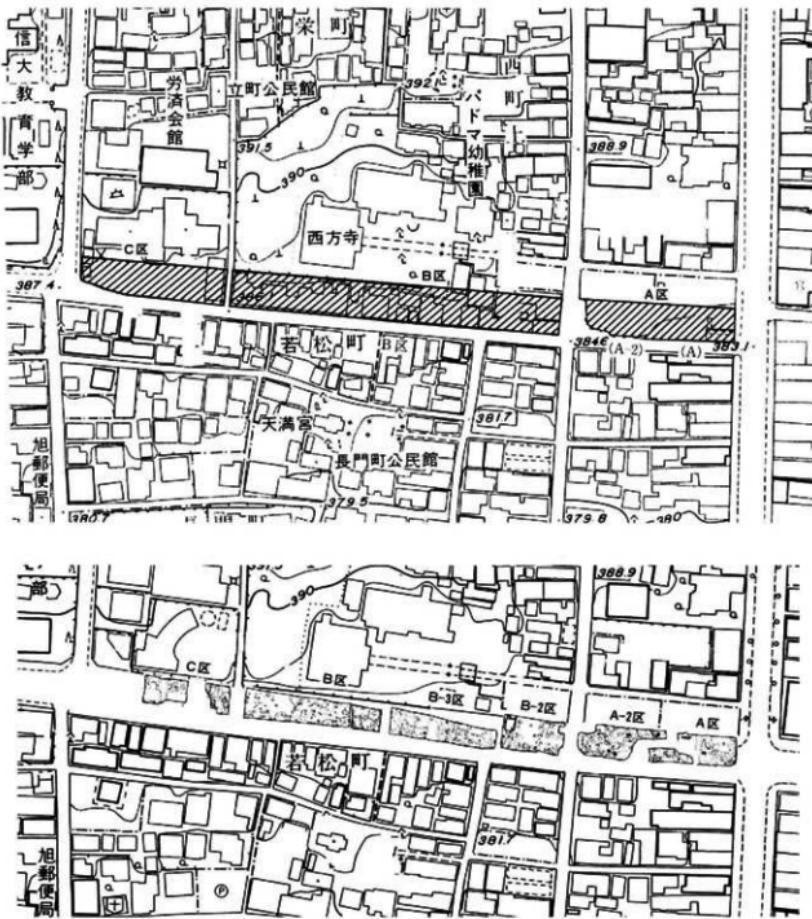
(大正15年測図・昭和27年修正)



4図 旧地形図および調査地周辺の字界図（1:5,000）

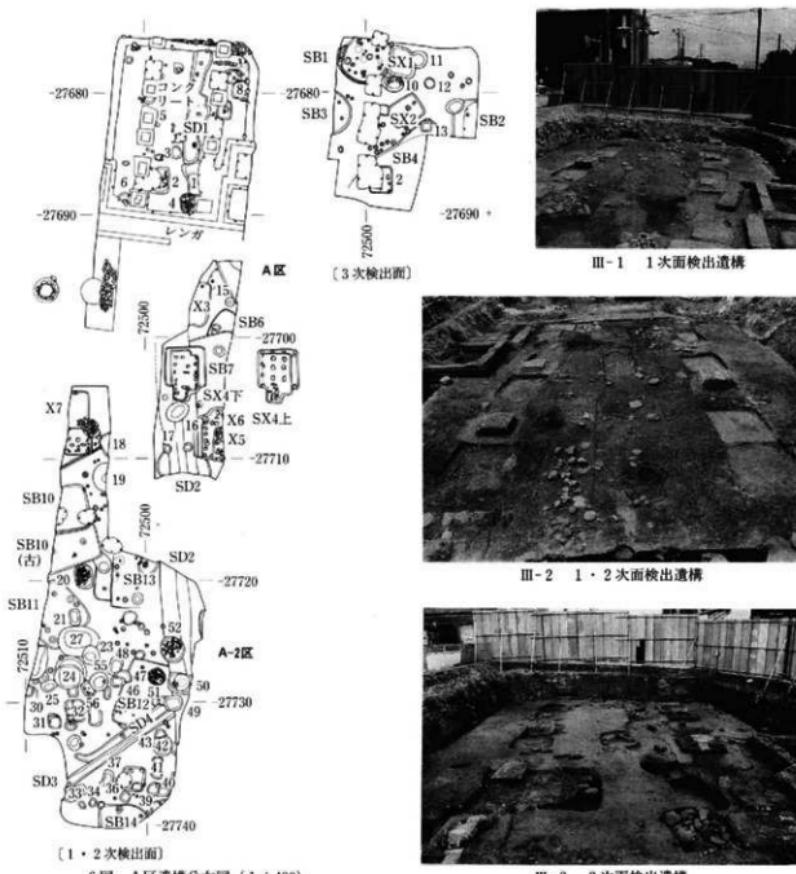
III 調査概要

調査の起因となる道路改良事業予定地の内、道路拡幅部分を発掘調査対象としたため、発掘調査範囲は幅員15mの中に限定され、さらに諸般の制約から実際の調査範囲の幅員は13m以内となっている。その延長は290mに及ぶため、国道406号に交差する市道路線を境界として便宜的に3地区に区分し、東からA～C地区と呼称して調査を実施した。さらに工事工程との調整により小調査地に細分した。



1 A区の調査概要

地形の勾配は北から南に緩傾斜を有するが、A区の東端付近においては南東方向の傾斜が加わる（4図上）。そのため削平土等による埋め立てにより上部堆積土は東にいくほど深くなり、東端においては1次検出面まで1.6mを測る。しかし、上部覆土が深いにかかわらず東側は普光寺参道（現中央通り）の商業市街地にあたり、主として近現代の建築物の基礎工事により破壊や搅乱が著しい。また、このA調査地のみに3次検出面が認められ、弥生時代中期の住居址が明確に検出されている。A調査地の西側からA-2調査地にかけて中世と思料される土坑が展開しているが、居住施設と思われるものは確認されない。竪穴住居址形態の落ち込みがあり、それぞれ住居番号を付したが、後世の搅乱と遺構が調査地外に延びているため内容・性格が不明な遺構が多い。



(7図) の特記遺構

IV章 揭露遺機 SK 2

コンクリート柱建物址（7図）長野信用金庫本店の建物の痕跡である。当金庫は同地に大正13年2月に開業し、昭和18年11月まで営業していた。レンガ積みの建物基礎も当時の面影を残す。西方に位置する築石は土蔵（銀行金庫）の存在場所に位置し、土蔵入口施設に伴う基礎地盤の一端と思われる。

調査地東端の石積み遺構 (III-5) 傾斜に合わせて積まれているが、乱雑であることから石垣の裏面又は挖え積みと思われる。時期不明。

S K 1 覆土には炭化物を多く含み中世土坑の在り方と近似するが、他の該期の土坑は2次検出面から確認されている。また、中世遺構と断定する確証遺物の出土をみない。

S E 2 石囲い戸戸で、石材は面を揃える。裏込めに黄褐色粘質土を用いる。内部には昭和期の魔材が多く認められ、銀行家屋の解体時にあわせて埋められたもの。

〔8図〕の特記遺機

IV 寶據載遺機 SB7、SX4·5·6、SK16、SD2

S B 5 西壁の一部を確認したにすぎなく、形態や規模等は不明である。
3次検出面からの遺構で、出土遺物から古墳時代に比定される可能性がある。

S B 6 S B 7 と重複関係にある。床面は若干の凹凸が認められるものの良好である。出土遺物はない。

S B 7 S B 6より新しいが、形態・規模・時期等は不明である。床面は平坦堅密でところにより5cm程の貼床が認められた。覆土は小礫混じり黒褐色砂質土である。

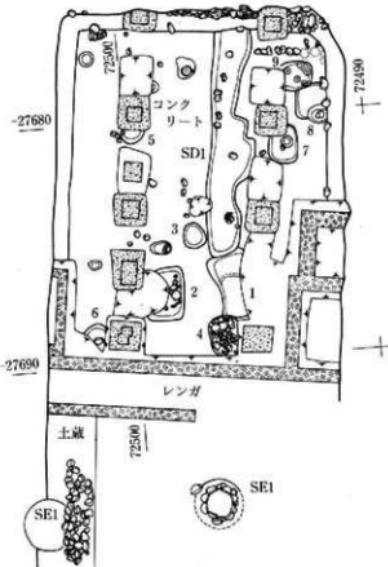
S B 8 形態は長軸4.5m程の橢円形を呈するものと思われるが、中央をSD2により破壊される。形態的には弥生時代中期のものに類似するが、柱穴や土器等の確定資料がない。

S K14 S B 5 からの深さ60cm、S K15 深さ52cm、S K17 深さ40cm・中世

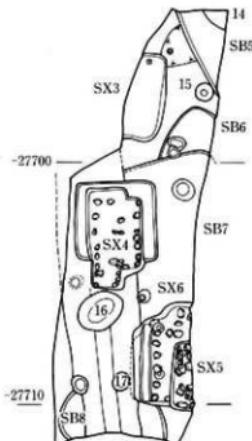
(9図) の特記遺機

IV 寶鏡載遺稿 SB1:4, SX1:2

S B 2 南東隅部を確認したにすぎず、形態が方形を呈するものと推定する以外は不明である。床面は判然とせず凹凸が著しい。検出面や出土遺物から古墳時代の所産と思われる。



7図 A調査地遺構分布図 (1:200)



8圖 A點赤地透鏡分布圖 (1 : 300)

S B 3 この遺構も南西部の一部を検出したにすぎず、形態を円形と推定するものの規模等は不明である。床面は判然としない。壁に沿って直径20cm・深さ20cm程の小穴が認められ、柱穴の可能性が高い。出土遺物はないが、遺構の形態から弥生時代中期に位置するものと思われる。

S B 4 A調査地の西端に位置し、他の住居跡形態の遺構と重複関係にある。床面が平坦で軟弱である以外は不明である。

S K 10~13 覆土は黒灰色砂質土で、他の遺構より黒味が強く、S K 12から古銭の出土をみたことから中世以降の所産と考えられる。

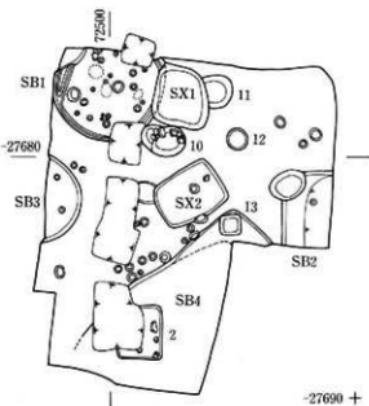
S X 2 A調査地の中央付近に位置する。長軸1.4m・短軸1.15m・深さ15cmを測る規模の長方形を呈する。床面は長軸北方向に若干傾斜を有するが平坦である。中央南寄りに直径20センチ・深さ10cm程の小穴が確認され、周辺に焼土が認められたことから小形の居住施設を想定する。年代は小破片の弥生時代中期土器片が出土していることから、この時期に比定する。



III-4 2次面検出遺構



III-5 3次面検出遺構



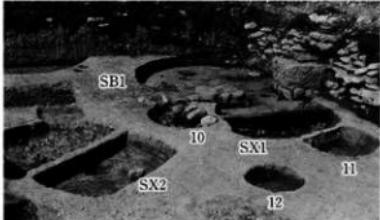
9図 A調査地3次面遺構分布図 (1:200)



III-6 A S X 4下層の検出



III-7 A調査地西検出遺構



III-8 3次面検出遺構

[10図] の特記遺構

IV章掲載遺構 SB10・11・13、SX7、SK23・

24・27・52・56、SD2

SB12 A-2 調査地の西寄りに位置し、SD2～4等により北側半分以上が破壊を受ける。東西2.5m規模の方形を呈する小形の遺構である。検出面からの掘り込みは浅く、5～10cm程度である。床面は平坦であるが軟弱である。柱穴やカマド等は確認されない。出土遺物から平安時代の所産と考えられる。

SB14 A-2 調査区の東端に位置し、遺構の大部分は未調査地に延びている。形態は変形を呈しており、西壁の北西隅部が丸味を帯びる。床面は凹凸があり判然としない。また、時代を比定する遺物の出土が無いことから居住施設でないかも知れない。

SB15 SX7・SK18・近世集石土坑と重複関係にある。形態が方形状と推定する以外の情報的資料は得られなかつた。

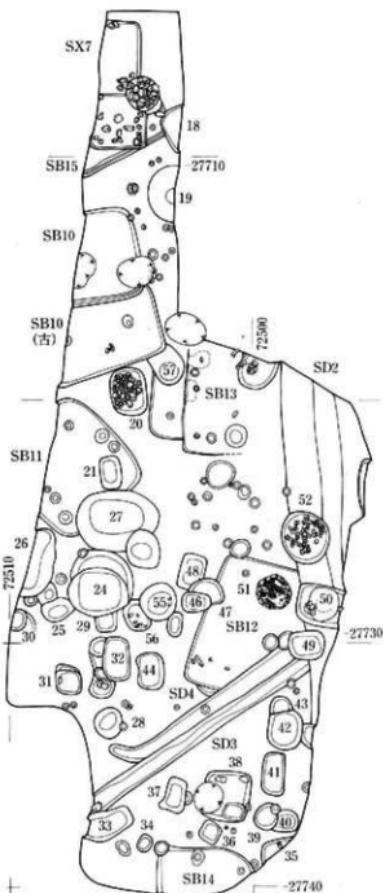
土坑群 調査区の東側に集中して展開している。形態は円形や長方形のもの、隅丸長方形を呈するものまで各種ある。掘りは深くほとんどが50cm以上あり、中には1m近いものもある。いずれも性格が不明であるが、SK50・52等は中世比定のSD2の上層から確認されていることから、この溝よりも新しい機能年代を与えることができる。ただし、出土遺物から同時期またはこれよりも古い遺構の存在の可能性が高い。SK38は後の明治期以降のものと判明した。

SK18 方形を呈する形態になると推定されるが、深さ12cmの規模で、平底であること以外不明である。

SK19 直径1.15m・深さ1.1mを測る大型の円形土坑である。掘り込みは漏斗状で、底面は丸底になる。図示できる程の土器片は出土していないが、総体的にみると中世に位置するものと推定される。

SK20 長軸1m・短軸0.7m・深さ21cm程の規模の隅丸長方形を呈する遺構である。上面には10～20cmの河原石・角礫による集石がみられた。遺物の出土がなかったため遺構の性格・時期等は不明である。

SK50 SD2 よりも新しい。隅丸長方形を呈し、長軸の規模は調査地外に延びているため不明であるが、短軸は約0.8mを測る。遺構の中央付近に検出面から10cm程掘り込んだ平坦面からさらに長軸0.7mの隅丸方形土坑が掘られている。調査では1m近く掘り進めたが底面にいたらなかった。上面には擂鉢状に20cm程の焼土の堆積を確認したが、本遺構の埋没期の所産と考えられる。



10図 A-2 調査地遺構分布図 (1:200)

S K51 SB12内にあり、直径0.73m・深さ約65cmの円形を呈する。掘り込み時の機能と検出時の機能に相異がみられる。前者は素掘りの単なる円形土坑としての役割をもたせたのに対し、後者は埋没時または埋め戻し時に土坑内縁に角礫を這らし井戸枠状にしている。さらに、枠石下面レベルに小礫を敷きつめている。性格は不明であるが、小礫の上部に石碑が置かれていたことから、前後者が一体をなす供養的な機能を有する施設であろうか。確証資料の出土は無いが時代的には近世遺構と考えている。

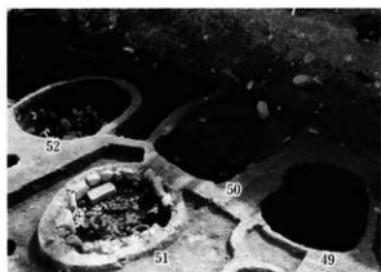
S K52 SD2よりも新しい。最大幅1.15m・深さ約50cmを測る規模の円形土坑である。覆土中層以上に角礫の混在が認められたが下層にはない。角礫は遺構の埋没段上で投げ込まれた可能性が高い。この遺構も確証資料の出土がみられなかったが、機能時期を近世にもとめる。



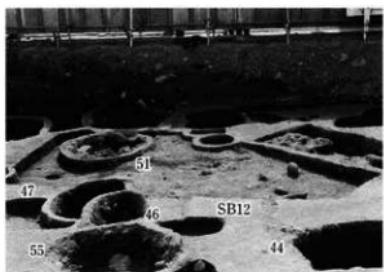
III-9 3次面検出遺構



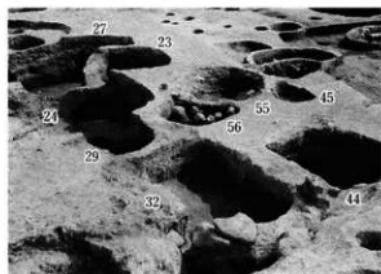
III-10 A-2調査地検出遺構



III-11 A-2調査地土坑群



III-12 A-2調査地遺構群



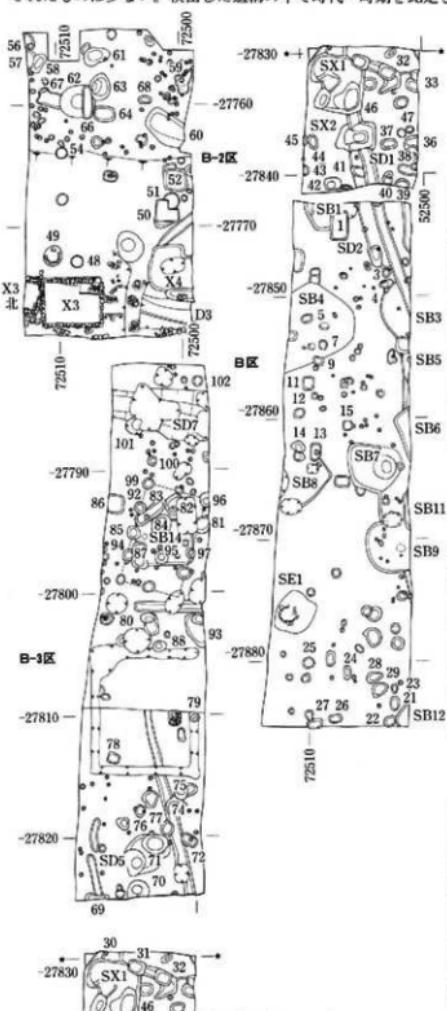
III-13 A調査地中世土坑群



III-14 ASK20

2 B区の調査概要

遺構検出面はA区同様西から東に傾斜を有する。東端が現更地面から約1mを測るのに対し、西端は50cm程になる。遺構は調査地の全面にみられるものの、時期不明の遺構または更地化による搅乱により旧態の状態で検出されたものは少ない。検出した遺構の中で時代・時期を比定したものは次のとおりである。縄文時代中期土坑3



〔12図〕の特記遺構

IV章掲載遺構 SK51・48・49、SD3、SX3・3北

SX4 東西方向に長方形の大型土坑と南北方向に調査区外に延びる隅丸の長方形土坑がL字形に合体したような形態になる。底面は平坦で色調の相異が認められることから同一遺構であろう。掘り込みは検出面から20~30cmである。西壁は溝状遺構と重複し正確な規模は計測できないが1.9m以上になる。中世のSD3より新しいことから機能年代を近世以降に求める。

SK62 上部遺構にSK66があり、SK63と重複関係にある。形態は長軸1.45mの不整円形を呈する、検出面から鉢状に掘り込まれ深さ1.2mを測る。底面は丸底状になる。この地区の他の土坑同様出土遺物から中世の年代を求める。

S K54 直径46cm・深さ5cmの円形を呈し、底面には桶の底板が残存していた。近世の所産と考えられる。

SK58 近世から明治期のごみ穴。

SK53 長軸58cm・短軸42cm・深さ15cmを測る規模の隅丸長方形を呈する遺構である。覆土中に角礫や石臼が認められたが、土器等の時代を推定する資料の出土はない。近世遺構であろう。

〔13図〕の特記遺構

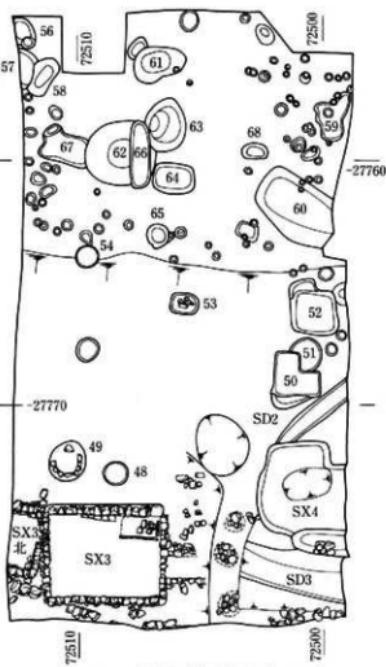
IV章掲載遺構 SD14、掘立柱建物址

この調査地中央付近は近世から明治期以降の搅乱が著しい。中世以前の遺構の分布密度が最も粗い空間であり、土坑の性格が求められる遺構や特記すべき遺物の出土はない。

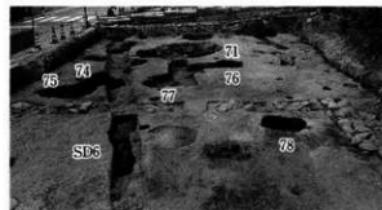
SD8 B-2調査区の東端に位置し、底面は地形に添って北から南に傾斜する。また、溝幅も南に拡張する。北幅1.9m・深さ50~60cm、南幅2.1m・深さ70cmを計測する。検出面は搅乱が著しく近代製品まで採集されたが、底面付近から出土した土器皿片等の遺物をもって中世の所産と位置づける。



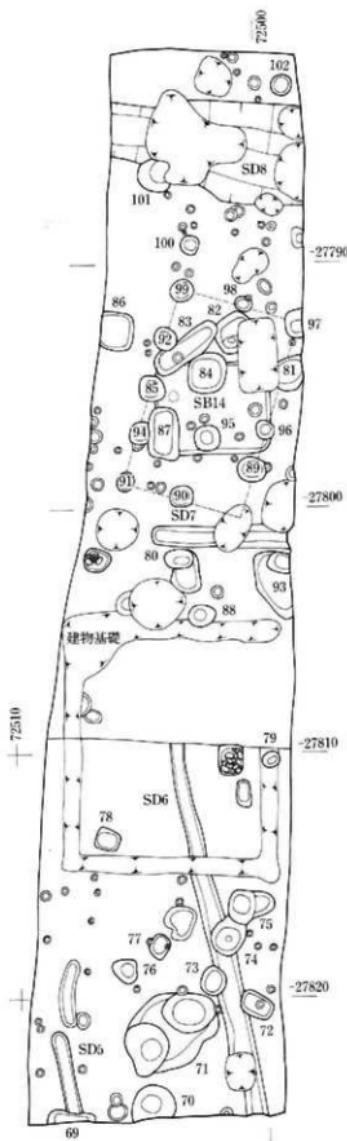
III-18 B-3調査地検出遺構



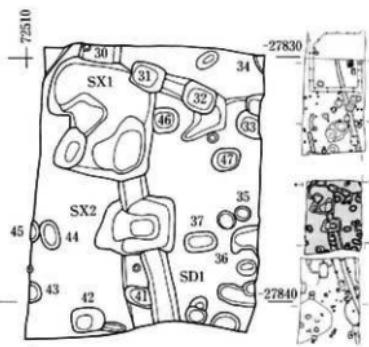
12図 B-2調査地遺構分布図 (1:200)



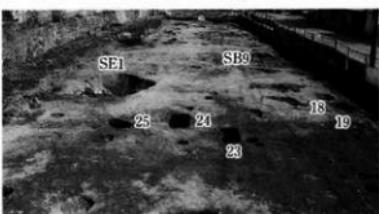
III-19 B-3調査地検出遺構



13図 B-3 調査地遺構分布図(1) (1 : 200)



14図 B-3 調査地遺構分布図(2) (1 : 200)



III-20 B調査地検出遺構



III-21 B調査地検出遺構



III-22 BSE1

[14図] の特記遺構

更地表土下遺構検出面までの堆積土は浅く、東端で約50cmあったものが西端では20cm前後に減じる。そのため近世以降の建造物等による搅乱が多い。中世であろういくつかの土坑状落ち込みが確認されているが、時代比定が可能な遺物の出土はみられなかった。

[15図] の特記遺構

IV章掲載の遺構 SB7~9、SK28~29

SB1~3・5・11・12 これらの住居址は遺構の一部を確認したにすぎず、形態・規模・時代等不明である。また、掘り込みも浅く、床面が軟弱で凹凸がみられ、焼土も確認されず、土器等の出土がないことから居住施設でない可能性もある。ただし、SB3は直径4.5m程の円形を呈するもので、弥生時代中期の住居址形態を思わせるが、該期の根拠資料の出土はみられなかった。

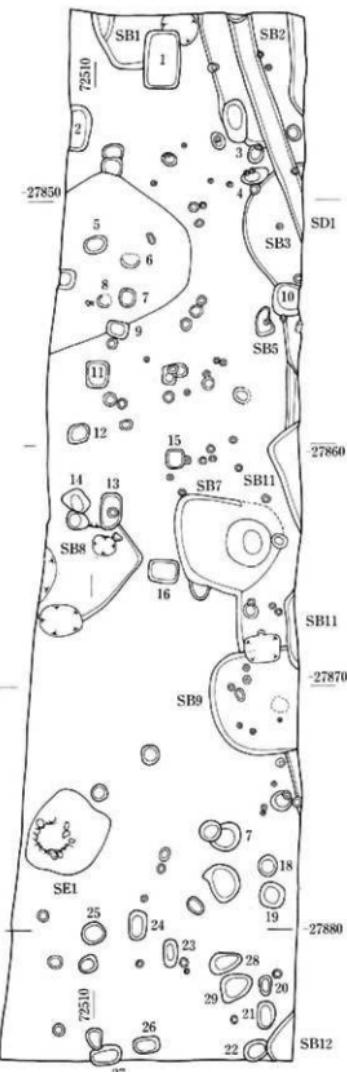
SE1 最大幅1.75mの不整形方の掘り込みに北に偏して河原石を積み上げ井筒部を造る。上部石組み内法が0.6mと狭いもので底面まで掘り進むことができなかつた。中世の遺物が多く出土しており、井戸外周の掘り方の規模が大きいことから出土遺物の年代前後に使用されたものと考える。

土坑・小穴 多数確認されているが、掘立柱建物址のように直列配列になるものはみいだせない。

縄文時代遺物包含層 調査地東側のSK5を取り巻く実線の範囲は当初住居址と考えていたが、厚さ数cmに満たない黒褐色を呈する縄文時代中期の遺物包含層が残存していた。土器片は小さく摩耗していた。



III-23 B調査地検出遺構



15図 B調査地遺構分布図 (1:200)

3 C区の調査概要

調査地の中央部分は生活道路で調査ができなかった。また、西側の南半分ほどは旧長野市役所の防火貯水槽により破壊を受けており、底部にはかろうじて中世の大溝C SD 1の遺構形態が残存していたにすぎない。市役所建設に伴う盛土造成により現地表面からの遺構深度は深いが、旧地表面からは30cm程度で検出面にいたる。この調査地での時代別遺構は、绳文時代と奈良・平安時代および中世の土坑・住居址・溝址を検出している。

(16図) の特記遺構

IV章掲載遺構 SB3・5・6・8、SK5、SD1

SB1 調査地の西端に位置する。南側は調査区外に延び、西と東側は他の遺構と重複し、北側は防火水槽により破壊を受けているため形態や規模等は不明である。床面はやや軟弱であるが平坦で、小穴が散在するが主柱穴配列にはならない。所属時期は不明であるが少量の绳文時代土器片を得ている。

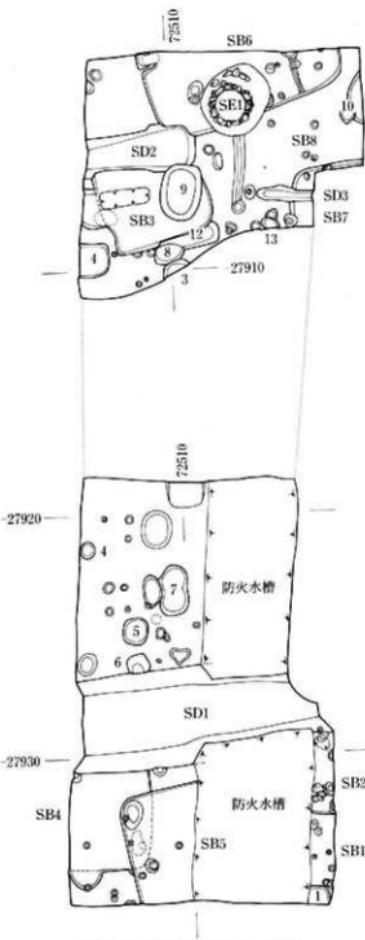
SB2 SB2を切り込んでいるものの、遺構の残存状況はSB1と同様である。西壁近くに角礫の集石がみられ、カマド構築材と考えられる。出土土器から平安時代の遺構であろう。

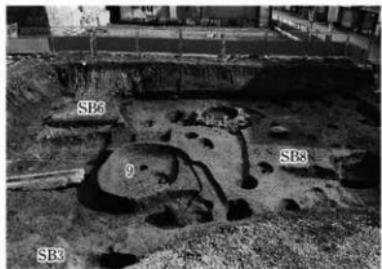
SB5 住居址の南西部を確認したに過ぎない。方形または長方形を呈するものと思われるが、カマドの所在や規模等は不明である。床面は貼床され堅緻で平坦であり、重複関係にあるSB5の上面までおよんではいる。遺物の出土はないが平安時代の所産と考えられる。

SK7 北西隅部の一部を検出したのみで遺構の大部分は調査区外にある。形態は隅丸方形を推測する以外規模等は不明である。出土土器から平安時代の遺構と考えられる。

SK9 SB3の床面を掘り込んでいる。長軸1.15m・短軸0.85m・深さ24cmを測る規模の楕円形を呈する。覆土は黒灰色砂質土であるが砂の混入が多い。中世の遺構である。

SE1 SB6と重複関係にある。長軸1.5m・短軸1.3mの円形に近い掘り方に、直径0.6mの石積み井筒部を中央付近に埋設している。底面まで調査がおよばなかったが、出土遺物や遺構の石積みが上面からは確認できなかったことから中世の所産と考える。





III-24 C 調査地検出遺構



III-25 C 調査地検出遺構



III-26 C 区西検出遺構



III-27 C S B 1



III-28 C S B 2



III-29 C S B 3、CSK 9



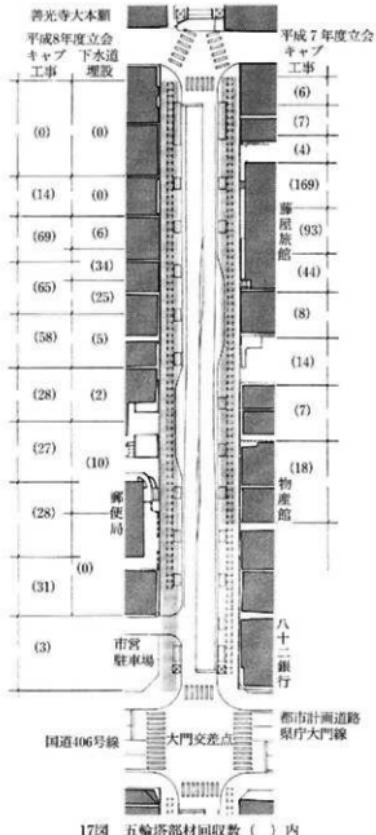
III-30 C S D 1 検出



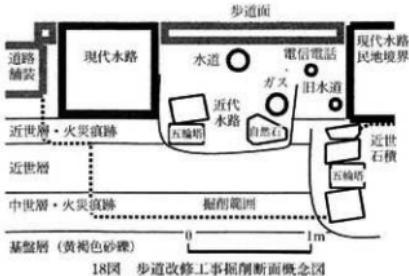
III-31 C S B 4 (右)・5 (左)

4 中央通り工事立会の概要

国道406号（若松町）道路改良事業の関連事業として一般県道長野農野線（中央通り）歩道等改修事業があわせて実施された。事業内容は歩道改修が主たる目的であるが、あわせて各種ケーブルの埋設ボックス設置、上下水道・ガス管敷設替え等の掘削工事に伴うものである。この節では調査日と五輪塔部材の出土個数を図として示す。平成7年キャブ工事においては370個、8年の工事に際しては380個の部材を回収した。回収総数750個のうち地輪が90%以上と大部分を占め、ついで水輪・火輪の順であるが個数は少ない。風空輪にいたっては数個にすぎない。出土地の個数の多くは藤屋旅館周辺部に集中するようである。地形の変換点に位置し、緩傾斜化の石積みまたは板石集中等が要因と考えられる。すべて弘化の火災後に地形整地等で再利用されたもので、原初形態を保っていたものは確認されない。現歩道面下約1mで弘化の火災層底面に、1.4m程の深さで中世層に至る。



17図 五輪塔部材回収数()内



III-32 近世石積み



III-33 近世水路

IV 遺構と遺物

調査地は中世から善光寺の門前町として形成された経過がある。また、戦国時代においては川中島の戦いに代表される戦場を被ったであろうし、江戸時代では弘化の地震による大火災の被害を受け、更には近代・現代の再開発等にみられるように、まさに土地の改変の歴史をみる思いがする。こうした意味からも今回の調査に期待をもたせるものがあったが、破壊や擾乱が隨所に認められ、僅かに基盤層に掘り込まれた遺構を確認・検出するのが精一杯のところであった。また、各時期の遺物が混在し、遺構の時期比定を難しくした。このような状況下での発掘調査だったので、本章では時代・時期の判明する遺物が出土した遺構を抽出して時代順に報告する。

1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構・遺物は調査地西側のB区・C区に認められるが、質・量ともに少なく、住居址1軒・土坑2基を抽出するにすぎない。

C S B 8

遺構（19図） C区東端に位置し、平安時代の住居址や中世以降の遺構と重複関係にある。そのため床面の一部と数個の小穴を確認したにすぎない。床面は平坦で硬く踏みしめられており、その形状および範囲から直径6m内外の円形住居址を想定する。小穴（IV-1のうち該期のものは縫刻部）は直径25~45cm・深さ20~30cm程度のもので、分布配置から主柱穴ではないだろう。調査範囲から焼土や灰坑は確認されない。

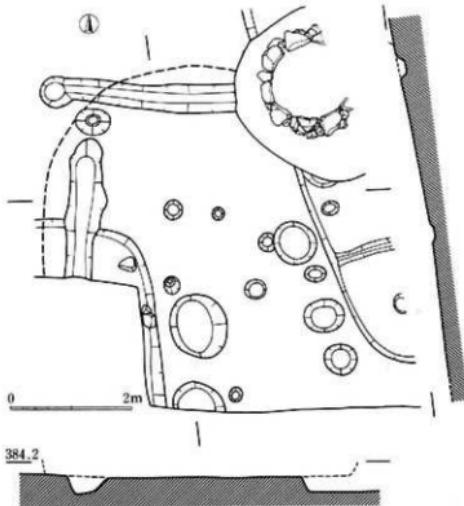
遺物（20図） 床面直上からの出土であるが、すべて小破片で図上復元可能なものはない。1は縄文地に縦位の平行沈線・三角形印刻文を施している。

また、刻み目をもつ突起を有す。2は横位の隆線および平行沈線を施す。3も横位の平行沈線を施し、その沈線に沿って刻み目を配す。5は橋状把手を有しており、一部刺突文も確認できる。4・6~9はいずれも竹管による平行沈線を施しており、9は縄文を地文とする。石器は打製石斧（80図15）が1個出土している。これらの遺物は縄文時代中期の所産である。

B S K 28

遺構（21図） B区西端に位置し、隣接してSK29がある。形態は不整隅丸三角形を呈し、長軸68cm・短軸最大幅44cm・深さ45cmの規模である。覆土には多量の炭化物を含んでいたが、焼土は認められなかった。

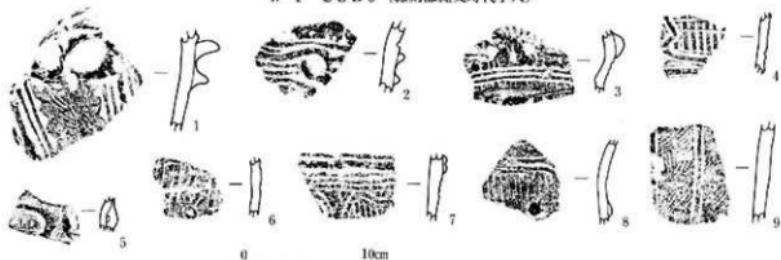
遺物 中期土器片が出土しているが、小破片で焼成が不良でざらつく。



19図 C S B 8 実測図 (1 : 80)



N-1 C S B 8 (縦割部繩文時代小穴)



20図 C S B 8出土土器拓影 (1:4)

B S K29

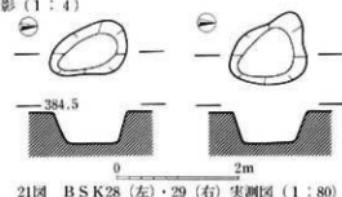
遺構 (21図) S K28の西に近接している。形態はS K28と同様不整形を呈し、長軸65cm・短軸最大幅55cm・深さ50cmの規模である。覆土に多量の炭化物を含む。周辺の土坑・小穴にはこのような在り方の覆土のものはなく、2基の土坑をもって存在していたものと考えられる。

遺物 (22図) 出土量は少ない。図示したものは深鉢の底部付近の破片である。L Rの縄文地に蛇行状に垂下する不連続沈線文を施す。胎土に長石・石英粒を含む。個体の残存度は4分の1である。

検出面・他遺構出土の遺物

内面に渦文を彫りだし朱と思われる真紅の顔料で彩られた土製耳栓 (24図18) と石鏡 (79図1・2)・石匙 (11・12)・打製石斧 (13・14・

16・17) が出土している。



21図 B S K28 (左)・29 (右) 実測図 (1:80)



22図 B S K29出土土器実測図 (1:4)

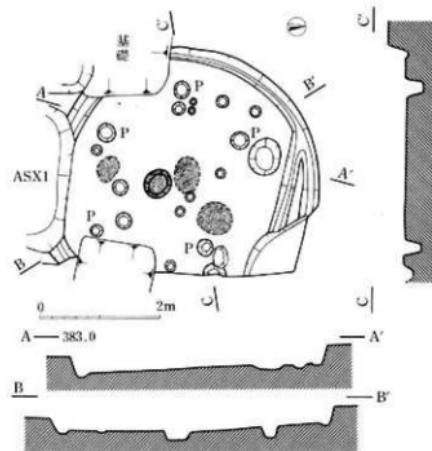
2 弥生時代の遺構と遺物

確認遺構は多くなく、調査地の東側にあたるA区・B区に点在するようである。このうち遺物を伴い検出された遺構はASB1とBSB9の住居址2軒にすぎない。時代は共に弥生時代中期の栗林式期に属する。

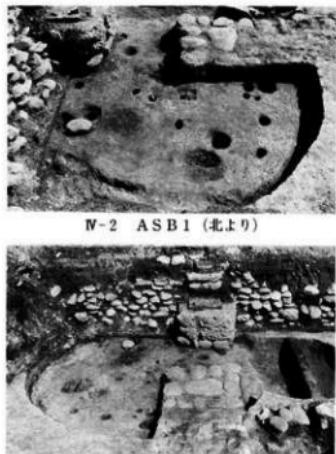
ASB1

遺構(23図) A区の東端に位置し、遺構の東側半分程は調査区外に伸びている。また、中世以降の搅乱も著しい。形態は円形を呈し、直径約4.75mの規模になる。検出面から床面までの深さは26cm前後を測る。床面は地形に添って東・南方向に傾斜を有するが、平坦で堅硬である。床面上には炭化物が薄く堆積していた。炉は住居址の中央西寄りに掘り込まれており、直径40cm・深さ7cm程のものである。内部に炭化物が充填し、底面に焼土が認められた。このほか炉の周辺に3ヶ所の焼上がみられ、礎の機能を有していたものと推定する。柱穴様の小穴が多数確認されているが、この内から6本柱主柱穴の小屋組を予想する。壁下には幅15~20cm・深さ5cm程の周溝が巡り、入口部では2重になる。

遺物(24図) 出土量は比較的多いが、すべて破片出土である。器種には壺(1~12)・片口鉢(13)・甕(14~17)・高杯がある。壺は口縁部がラップ状に開き、細頸形態になる。口唇部は面取形になるものが多い中で、5には4個の突起が付され2孔1対の小円孔が対面2ヶ所に穿たれる。文様は口唇部を縄文で施し、頸部には沈線文で区画された横位の文様帶を構成する。2の沈線文間の擬隆帯には縄文を、3・9には半月形押引文を、6には波状文を、8には縄文地に山形文を、7には8の文様に半月形押引文が加飾される。体部の文様は11にみられ、垂下する波状文帯とその両側を半月形押引文を施す。1次調整はハケナデにより、ヘラミガキで仕上げる。片口鉢は内傾する口縁部を特徴とし、一端をつまみ出し片口とする。内外面ともヘラ・ハケナデ調整である。甕の最大径は体部中位にあり、砲弾形態の器形(17)になる。口縁部形態に3種あり、袋状になるもの(14)・くの字状に外反するもの(15)・さらに屈曲するもの(16)がある。文様は口唇部に縄文、体部に帯状の波状文を巡らすもの(15・16)、口縁部と頸部下に波状文と体部に綫位の羽状文を巡らすもの(14)がある。17

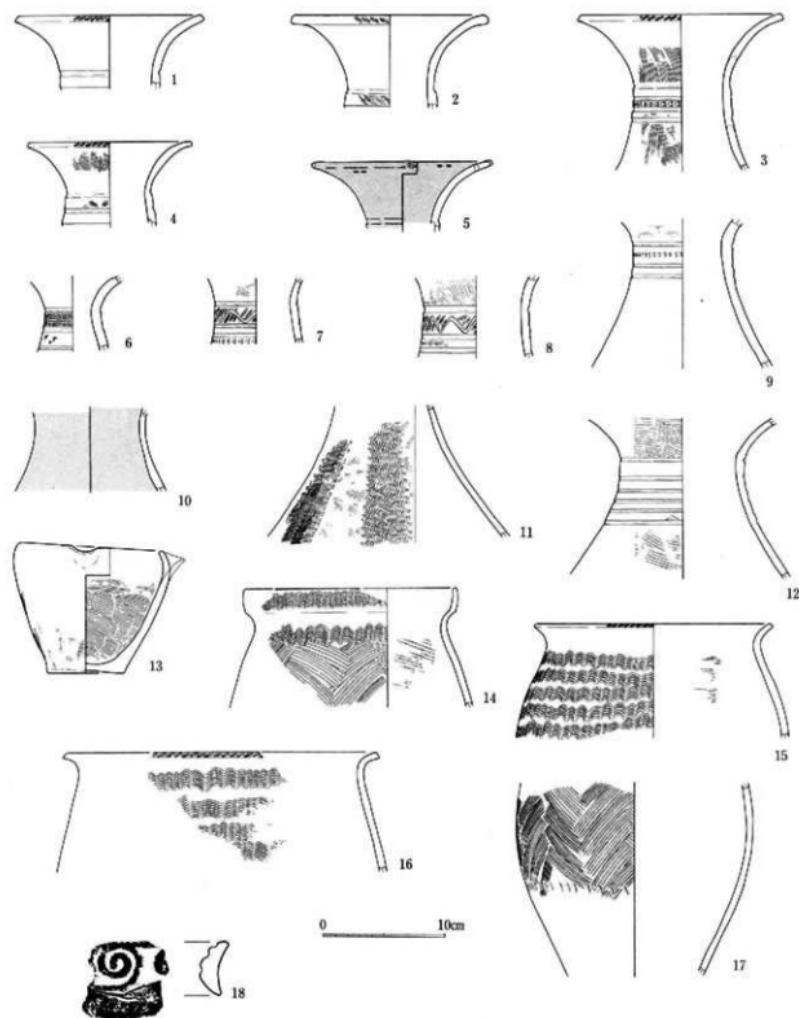


23図 ASB1実測図 (1:80)



W-2 ASB1 (北より)
W-3 ASB1 (西より)

は羽状文を体部下位まで施し、下端に櫛齒列点文を巡らす。18は縄文時代後期の土製耳栓である。この他に打製石鏨（80図6）・磨製石鏨（7）・扁平片刃石斧（18）・大型蛤刀石斧（23）の石器類や蛇紋岩製で指輪と思われる円環が出土している。



(1 : 2)

24図 ASB 1 出土遺物実測図 (1 : 4)

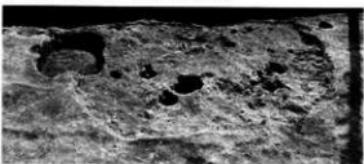
B S B 9

遺構（25図） B区の西端近くに位置する。調査では南側が調査区域外に延びており、北半分程を露呈したにすぎない。形態は東壁が内屈気味の不整円形を呈するものと思われる。しかし、遺構中央付近と考えられる炉の位置が住居址内は北寄りに存在していれば隅丸長方形の可能性もある。南北間の規模は不明であるが、東西間は4.2mを測る。掘り込みは検出面からの深さ20cm前後を測るが、床面の凹凸が著しい。南北軸の床面は南に傾斜する。炉は焼土を伴う深さ数cmの窪みになるが、使用頻度が少なかったためか底面は焼土塊化していない。柱穴と思われる小穴が北壁寄りにみられる。配列から4本柱の小屋組が考えられる。

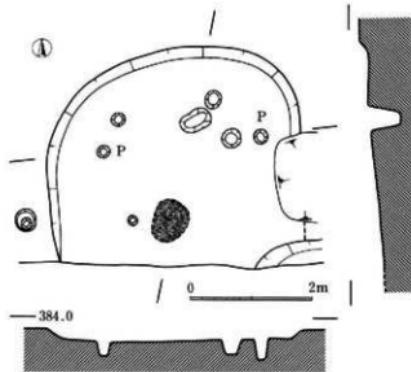
遺物（26図） 出土量は多くない。器種には鉢（4）・台付甕（1・2）・甕（3）のほか有孔円板がある。体は内外ともヨコヘラミガキが施され、赤色塗彩される。1の台付甕は体部が小形の深鉢形を呈し、最大径が口唇部にある。頸部から体部中央にかけて波状文がみられる。2も同形態であるが、最大径は体部中位にある。口縁部の施文は網文地に2段の山形沈線文と山形を埋める1段の断絶する直線文である。頸部下はコの字重ね沈線文とボタン状貼付文が施文される。甕は最大径が口唇部にあるものの体部中位の直径数値と大差ない。文様は頸部に1帯の波状文を巡らし、体部は継ぎの羽状文になる。有孔円板は土器片の一部を打ち欠き円形にしたもので、5・6・8は両面が赤色であることから浅鉢または高环片である。7は壺片で、円孔は未通である。大きさの直径は5が3.4cm、6が4.0cm、7が4.8cm、8が2.7cmをそれぞれ測る。この他に完形の大型蛤刃石斧（80図25）が出土している。

検出面・他の遺構出土の遺物

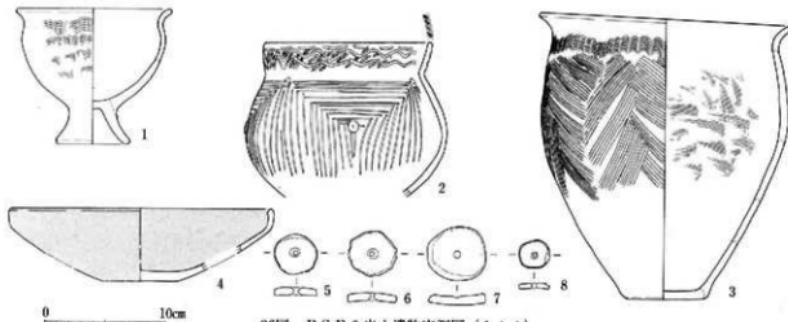
打製石鎌（80図3～5）・扁平片刃石斧（19）・方柱状片刃石斧（20）・磨製石包丁（21）・大型蛤刃石斧（22・24）等の石器類がある。



N-4 B S B 9 (北より)



25図 B S B 9 実測図 (1:80)



26図 B S B 9 出土遺物実測図 (1:4)

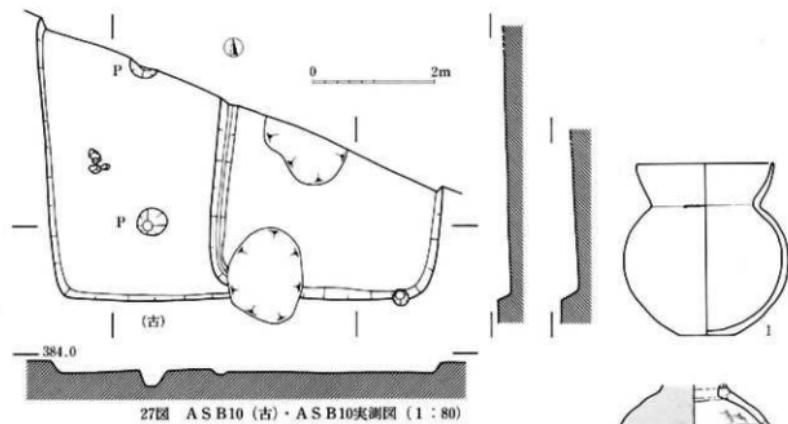
3 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は前代よりも数を増すものの、住居址を中心とする遺構の分布はA区・B区にみられ調査地の東側に限定される。時代比定可能な遺構は住居址7軒が検出されている。時期別では前期がASB10(古)・ASB11の2軒、中期ではASB4の1軒、後期ではASB7・ASB10・ASB13・BSB14の4軒である。

ASB10(古)

遺構(27図) A区の中央付近に位置する。東側は後期のSB10と重複し、北側は調査区外に延びているため詳細な形態・規模等は不明である。形態は方形と推定する。西壁の北端が湾曲気味になることから一辺の規模は4.8m前後になるものと想する。検出面から床面までの掘り込みは20cmである。主柱穴は西壁に添って2個の小穴をあてる。東壁添いのものはSB10の貼床下にあるものと考え、4本柱の小屋組を想定する。床面は平坦であるがそれほど堅緻なものではない。炉または焼土等は確認されない。

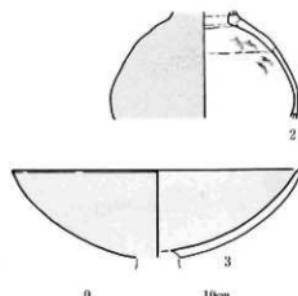
遺物(28図) 出土量は少なく、すべて破片出土である。体部が球形で口縁部が内湾気味になる精製の壺(1)、内外面共に赤色塗彩された浅い楕円形の高環壺部(3)、外面および口縁部内面に赤色塗彩を施す壺(2)が出土している。



27図 ASB10(古)・ASB10実測図(1:80)



N-5 ASB10(古)・ASB10



28図 ASB10(古)出土土器実測図(1:4)

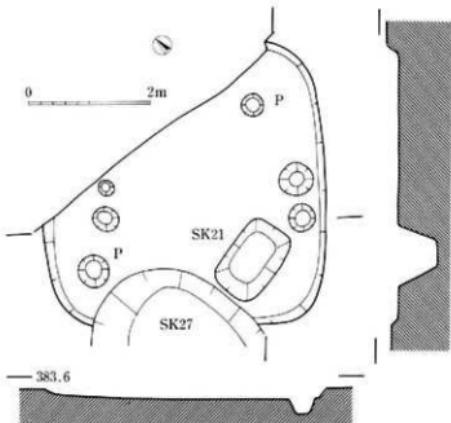
ASB11

遺構（29図） A-2調査地の中央付近に位置するが、北壁および北西隅部の3分の1程が調査区外に延びる。南壁は中世のSK27に切り込まれ、SK21を内包する。形態は隅丸方形を呈し、東西4.65m・南北推定4.7mの規模になる。検出面から床面までの深さは北壁が最大値の20cmを測る。床面は西から東に傾斜を有するものは平坦である。主柱穴は定かではないが北東隅と南西隅の小穴と考え、4本柱の小屋組を想定する。炉の痕跡である焼土は確認されないが、未調査地の北壁寄りに存在が予想される。土器類は住居址の中央付近の覆土中から集中して出土した。出土状況から住居の廃絶後の埋没途上で投棄されたものと思われる。

遺物（30・31図） 完形品を含む器体の残存度の高い個体がめだつ。器種も多様な様相がみられ、器台（1～9）・高环（10）・瓶（11）・深鉢（12）・鉢（13～18）・壺（19～22）・甕（23～30）等がある。器台は環部や脚部の形態に相異がみられる。環部が丸味を帯び橢形を呈するもの（1・3）と体部が屈曲して有段になるもの（2・4）、その中间に位置するもの（5）がある。脚部では裾部が大きく外開するもの（1・7）と直線気味になるもの（3・4・6・8・9）があり、中间形態として2がみられる。脚部の円孔も3個のもの（1・2・6・7・9）と4個のもの（3・8）がある。

4・8は环底部から脚部に円孔が貫通する。

ヘラミガキ調整が多用され、1・6・7・9には赤色塗彩が施される。10は环部が皿状で脚部が环底部外縁に付加され、ヘラミガキ調整をうけ赤色塗彩される。11は体部が鉢形をし、底部の孔端が外部に張り出す。調整はナデおよびハケナデによる。鉢形土器は盛りつける器としての共通の用途から器形の相異が最も大きい。12の深鉢はナデ調整の痕跡を残すなど雑な作りである。13～15は小型丸底鉢と呼称されているが13・14は平底になる。共に口縁部を形成し、最大径が口唇部にある。調整にはハケナデが多用される。該期特有の小型丸底形土器が組成化しないことを認められ



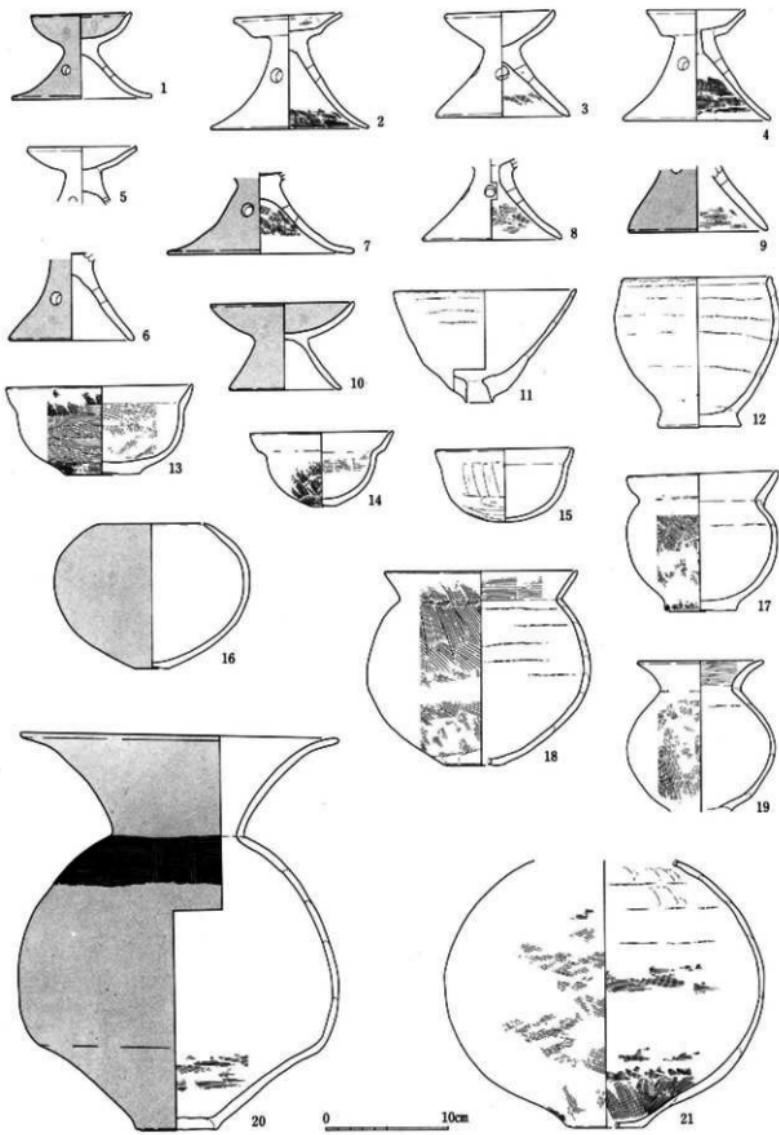
29図 ASB11実測図 (1:80)



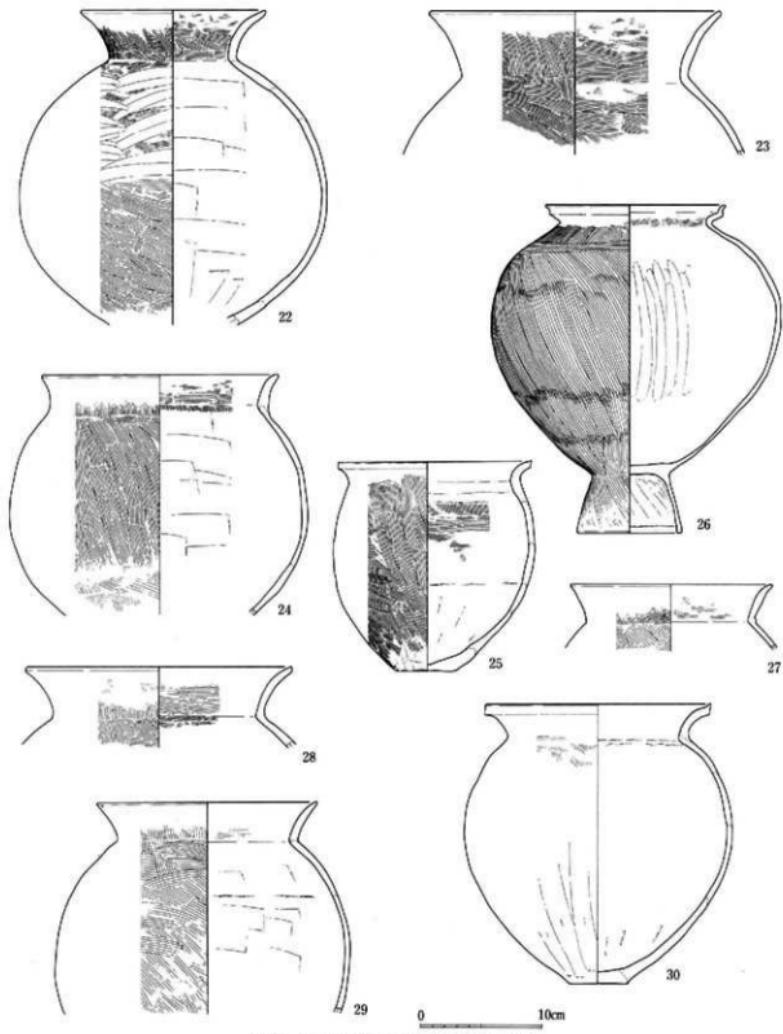
N-6 ASB11・中世土坑



N-7 ASB11・中世土坑



30図 AS B11出土土器実測図(1) (1 : 4)



31図 AS B11出土土器実測図(2) (1 : 4)

ば、この器種が器台とセットをなすものであろう。16は無頸壺と呼ばれるもので弥生時代の系譜を引くものの、口縁部の内傾が著しく体部が球形を呈するようになる。体部外面はヘラミガキが施され、赤色塗装される。17・18は変形を呈する一群で、口縁部径と器高の数値が前者の方が大きいかまたは近似数値になることを特色としている。調整にはハケナデが多用される。壺においても形態の変化が多様である。19は小型広口壺で、球形の体部から口縁部が外反しながら外開する。20は器形においても文様施文・調整においても弥生時代後期の影響を強く残す壺であり、単独出土であれば箱清水式土器と見紛う。21・22・23は球形胴の広口壺である。23は甕の可能性もあるが口縁部が長く、大きく外反することからこの類に分類した。外面の調整はヨコ・ナナメハケナデが多用される。甕にもこの調整技法が基本となっているが、タテハケナデが主流のようである。26はS字状口縁台付甕で、肩部にハケ状調整具による1帯の平行線文のほかは、体部全面から台部にかけて文様を意識したタテハケ調整痕を残す。口縁部の調整はヨコナデである。25・30の口唇部は面取りされており北陸系土器の影響が考えられる。この他に砥石（81図5）が出土している。

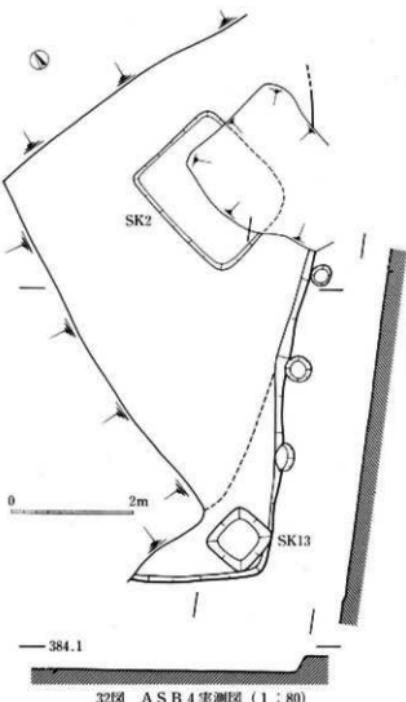
検出面・他遺構出土の遺物

中世の土坑A SK27から前期の所産である器台脚部・ハケナデを多用する球形胴の甕が出土している（65図4・5）。

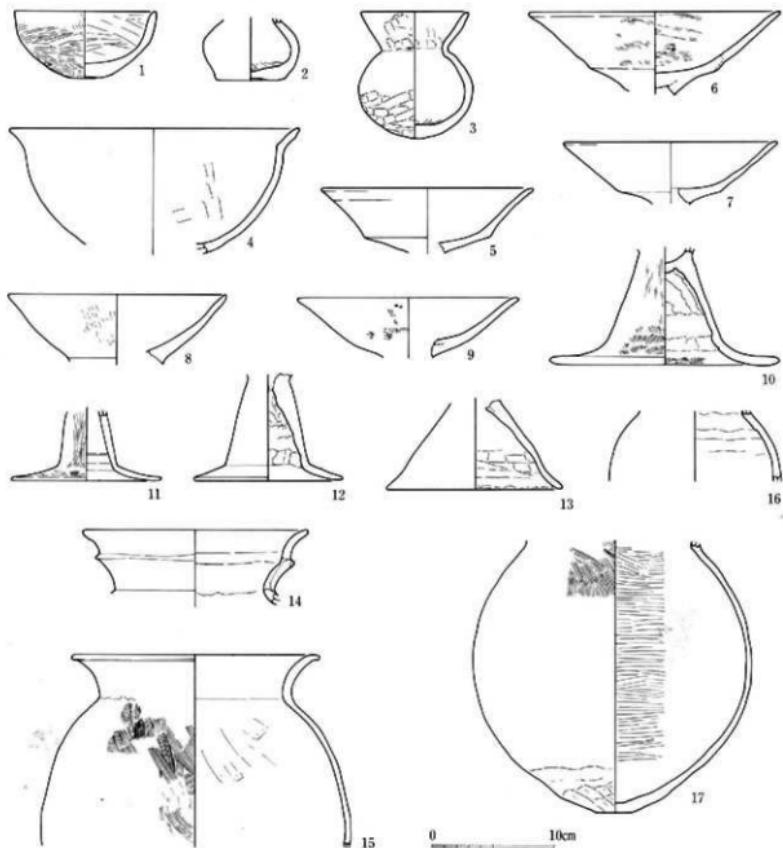
A S B 4

遺構（32図） A区のA調査地西端に位置する。中世以降の土坑との重複や擾乱が著しく、南西部が調査区外に延びているため調査では東壁の一部と床面を検出したにすぎない。形態・規模等は不明である。東壁における検出面からの掘り込みの深さは26cmを測る。床面は平坦であるが軟弱である。焼土や柱穴は確認されない。

遺物（33図）すべて破片状態での出土である。器種には壺（1）・小型壺（2・3・16）・高壺（4～13）・甕（15・17）がある。壺は楕円形を呈し、小さな平底になる。小型壺は2形態あり、平底のもの（2）と小型丸底形土器と呼ばれるもの（3）である。1～3の調整はハケナデのちナデを基調にしている。3の底部外面はヘラケズリで調整される。高壺の形態も各種みられる。壺部が楕円形を呈するもの（4）、皿形で底部と体部の接合部が有段になり鈍い棱を形成するもの（5～7）、皿形で脚部から体部が直接立ち上がるものの（8・9）がある。脚部も3形態あり、ラッパ状に開き、脚部が大きく外開するが体部との境が明瞭でないもの（10）、筒状の体部から脚部が屈折するものの（11・12）、壺部との接着部から直線的に外開してラッパ状になるもの（13）がある。これらの調整は脚部内面を除き、ハ



32図 A S B 4 実測図 (1:80)



33図 A S B 4 出土土器実測図 (1 : 4)

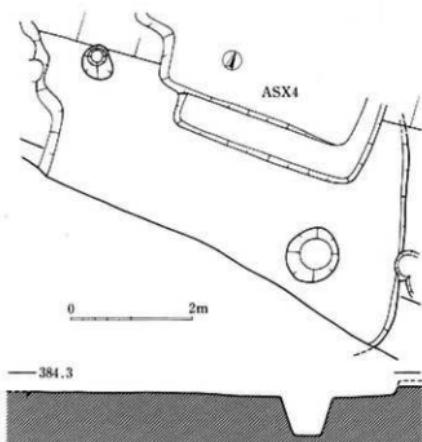
ケで器面を整えたのちヘラミガキが施される。壺の体部は球形胴になり、14の口縁部は有段になる。調整はハケナデとヘラミガキが多用される。17の底部は小さな平底をなし、周囲はヘラケズリにより調整される。

検出面・他造構出土の土器

中世の土坑ASK2より増(60図3)と小型丸底形土器(4~6)・高环が出土している。外面はヘラミガキを基調とし、内面はナデによって調整される。A区より石製模造品(80図9~10)が出土している

A S B 7

遺構(34図) A区の中央付近に位置する。北側は近世のSX4・中世のSD2、西側は近世のSX6と重複関係にあり、南側は調査区外に延びているため調査では東壁と床面の一部を確認したにすぎない。形態・規模・カマド・主柱穴等は不明である。検出面からの東壁の掘り込みは22cmを測る。床面は5cm前後の貼床がみられ、



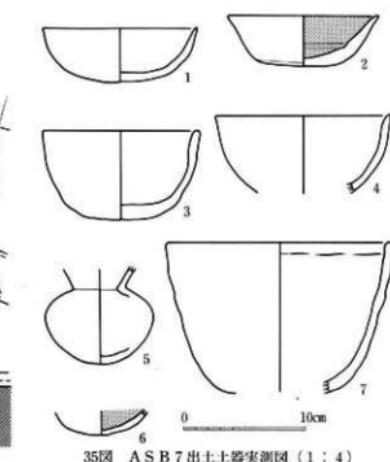
34図 A S B 7 実測図 (1 : 80)

平坦で堅穢である。

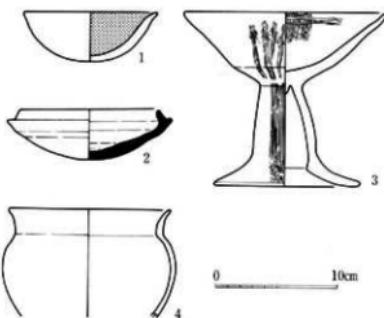
遺物 (35図) 出土量は少ない。器種には環 (1 ~ 4)・小型丸底形土器 (5・6)・深鉢 (7) がある。環は楕形を呈し、丸底氣味である。内外面共にヘラミガキが施される。小型丸底形土器は体部上位に最大径があり扁平化する。調整はヘラナデによる。深鉢は雑な作りで外面はヘラケズリ様のナデ、内面はナテ調整である。

A S B 10

遺構 (27図) A区の中央付近に位置し、A-2調査地に属する。調査は当初1軒の住居址を予想したが、のちに床面の状況や北壁下の周溝状溝の存在



35図 A S B 7 出土器実測図 (1 : 4)



36図 A S B 10 出土器実測図 (1 : 4)

から古墳時代前期の住居址と重複関係にあることが判明した。形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、住居址の東側半分程が調査区外にあるため全貌は不明である。南北3.7m・床面までの深さ18cmを測る。床面は貼床され、平坦で堅穢である。柱穴・カマドは確認されない。

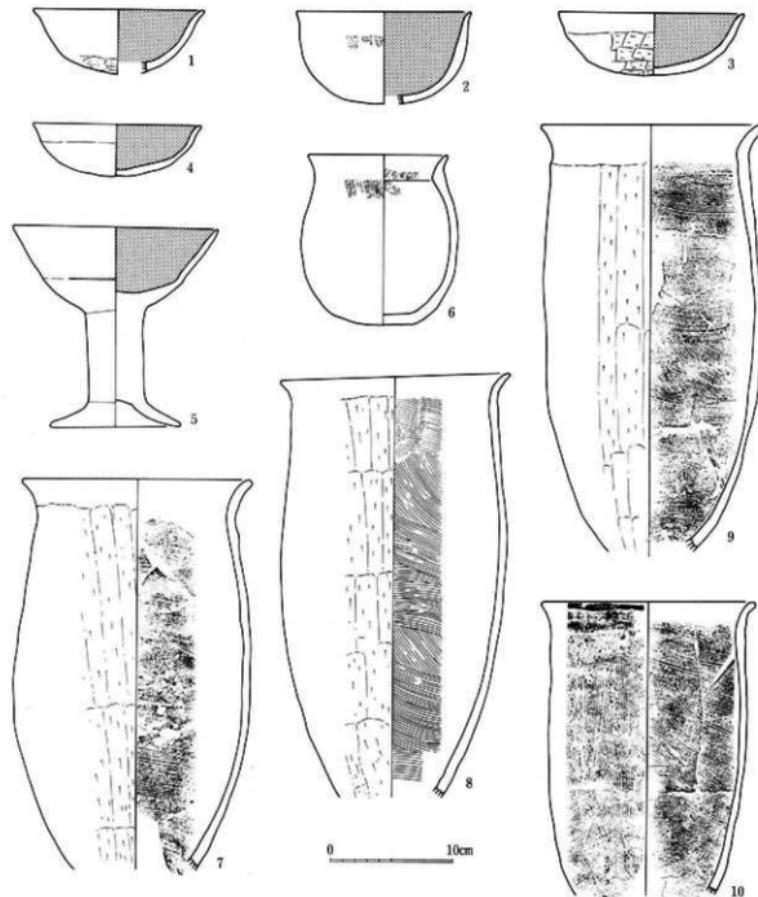
遺物 (36図) 出土量は少ない。器種には黒色土器環 (1)・鉢 (4)、土器高環 (3) および須恵器环身 (2) がある。黒色土器環は口縁部が外反し、丸底の楕形の器形になる。内外面共にヘラミガキが施され、内面は黒色処理される。高環は環部下位に鈍い棱を形成し、筒状の脚部から脚部が外開屈折する器形になる。環部のヘラミガキは雑で、外面ではハケ調整痕を残し暗文風になる。鉢は小型變形をなし、内外面共に雑なヘラミガキが施され黒色処理される。須恵器环は器高が低く皿形を呈し、口縁部の蓋受部や立ち上がりが短く銳利さがない。陶邑編年でTK209の時期を求める。

A S B 13

遺構 (38図) A区の西側に位置し、A-2調査地に属する。この遺構も中世以降の搅乱が著しく、遺構が調

査地外に延びている可能性があり北壁と東壁の一部を検出したにとどまる。そのため形態が方形を呈するであろうと推定する以外規模等の詳細は不明である。カマドは北壁に構築されていたが調査では火床の焼土を確認したにすぎない。床面は部分的に貼床状の堅硬な部分が認められたが、総体的には凹凸がある不明瞭な床面である。主柱穴は不明である。遺物はカマド周辺から出土した。

遺物（37図） 出土量が多い。器種には黒色土器環（1～4）・高环（5）・甕（6～10）がある。环は丸底・楕形で口縁部先端がわずかに外反する。高环の环部は底部との境に鈍い棱を形成し、体部は直線的に外開する。脚部は円柱状の粘土塊そのまま用い、裾部が外開屈折してここのみ中空化する。以上の土器はヘラミガキ調整が



37図 AS B13出土土器実測図（1：4）

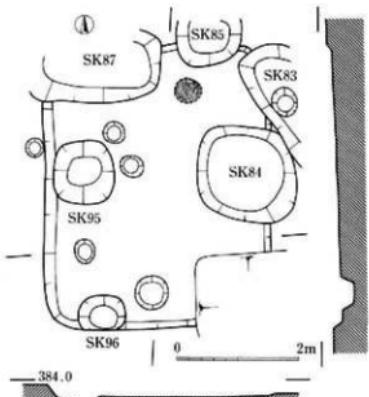
用いられ、内面が黒色処理される。甕の6は小形のもので鉢の機能を有すると思われる。9~10は大形の甕で、口縁部が緩く外反し、体部が長胴で鳥帽子形になる特色がある。最大径は口縁部にあるが、体部中位の直径と大差がない。7~9の体部外面の調整はタテヘラケズリによって行われているに対し、10はタテハケナデである。内面は共にヨコハケナデ調整である。

B S B14

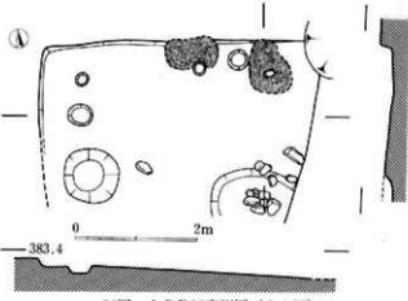
遺構（39図） B区の東寄りに位置し、B-3調査地に属する。全形を検出したものの、後世の

遺構との重複関係が著しい。形態は長方形を呈し、南北4.65m・東西3.7m規模になる。検出面からの残存掘り込みは西壁が最も深く21cmを測る。北壁中央に近接して直径20cm程の焼土が認められた。カマドの痕跡と思われるが構築石材等は確認されない。主柱穴は小穴の配置からは抽出されない。床面は平坦で軟弱である。

遺物（40図） 当該期の土器は土師器甕の1個体にすぎない。口縁部は頸部から弧を描くように外反する。体部は長胴形を呈するものと思われる。調整は内外面ともハケナデが多用され、外面はさらにヘラナデが施される。



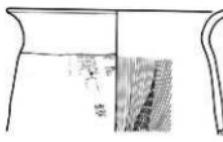
39図 B S B14実測図 (1 : 80)



38図 A S B13実測図 (1 : 80)



N-8 B S B14・掘建柱建物址



40図 B S B14出土土器実測図 (1 : 4)

検出面・他遺構出土の遺物

近世の溝址B S D 3から堆と甕が出土している（78図4・5）。堆は口縁部がやや外反気味に立ち上がり、扁平化した球形胴の器形になる。外面の調整は雑なヘラミガキである。甕は体部が円筒形で、口縁部がわずかに外開するものの明確な頸部を形成しない。調整はヘラナデによっている。

中世の土坑A S K24から鉢（64図8・9）が出土している。形態は無頸壺様である。8の外面はヘラケズリのちヘラナデで仕上げている。9は内外面共に雑なヘラミガキが施され、内面が黒色処理される。

中世の溝址A S D 2から土師器甕（71図33・34）・高环（35・36）・鉢（37）が出土している。

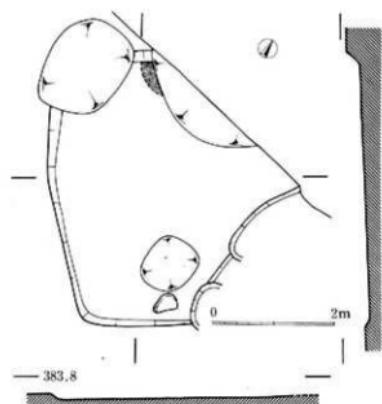
4 奈良・平安時代の遺構と遺物

奈良・平安時代の遺構はB区の西側からC区にかけて展開している。いわば調査対象地の西半分に限られる。時代別ではBSB8・CSB6が奈良時代に比定され、以下の遺構は平安時代の所産である。C区SB3・SB5・SK5の2軒の住居址と1基の土坑である。

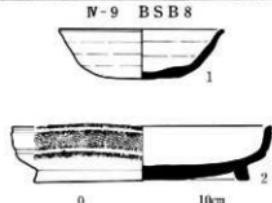
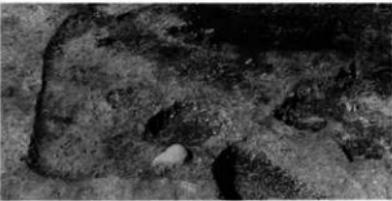
BSB8

遺構（41図） B区の西側に位置し、B調査地に属する。調査では南壁と東壁・西壁の一部を検出したにすぎない。形態は遺構の北側が調査区外に延びているため定かでないが、一辺4.5m前後の方形を呈するものと推定する。検出面からの残存壁高は北壁が最も高く18cmを測る。カマドは北壁に構築されていた可能性が高く、壁下に焼土が残存していた。床面は北から南に傾斜を有するが平坦で堅緻である。

遺物（42図） 出土量は少なく、器形のわかるものは須恵器の2個体にすぎない。1は壺で、底部外面にいわゆるヘラオコシと称する非回転のヘラケズリがみられる。2は整で、底部外縁に高台を付す。体部は内湾気味に立ち上がり、2条の沈線間に1帯の波状文を巡らす。底部は回転ヘラケズリが施され、丸底になる。



41図 BSB8実測図 (1:80)



42図 BSB8出土土器実測図 (1:4)

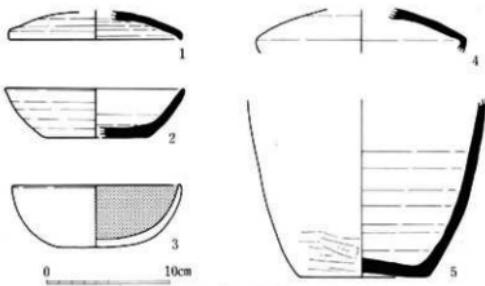
CSB6

遺構（44図） C区の西側遺構群のひとつであるが、後世の遺構・搅乱の中からの検出である。また、遺構の北側半分以上が調査区外に延びているため全容は不明である。形態は隅九長方形と推定され、東西（長軸）8.2m前後の大型住居になる。ただし、西壁寄りに東壁と並行する周溝状の溝がみられ、本来の西壁位置の可能性があり、この推論が正しければ6.2mの規模になる。その後何らかの理由により拡張したものと思われる。検出面からの掘り込みは北壁が最も深く34cmを測る。カマドは東壁に構築されており、両袖と火床焼土が残存していた。主柱穴は4個方形配列と予想される。床面は西に傾斜するが、平坦で堅緻である。

遺物（43図） 出土量は少ない。器種には須恵器蓋（1）・壺（2）・壺（4・5）・黒色土器壺（3）がある。蓋は体部から口縁部を面取状に形成する。壺の底部には糸切り痕がある。4は壺の肩部で、5は体部下半の破片



IV-10 CSB 6・井戸址



43図 CSB 6出土土器実測図 (1:4)

である。共にロクロ調整で仕上げている。3は内面に黒色処理が施された楕円形の壺で、底部外面は回転ヘラケズリで仕上げている。

掘立柱建物址

遺構 (45図) B区の中央付近に位置し、B-3調査地に属する。円形・隅丸方形・楕円形を呈する土坑の長方形配列をもって本遺構を構成する。規模は東西4間・芯々間全長8.2m・1間2m、南北2間・芯々間全長5m・1間2.5m前後になる。検出面からの掘り込みは深いが、30~68cmと一様でない。

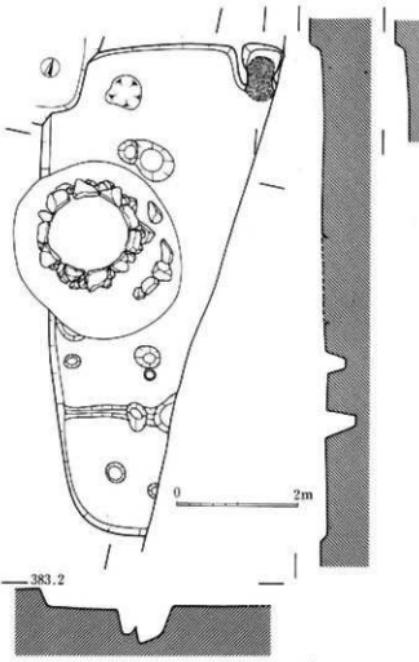
遺物 奈良時代に比定される須恵器壺・高台壺の破片が出土している。

CSB3

遺構 (46図) C区の東端に位置するが、後世の遺構および擾乱と重複しており全体を検出することができなかった。形態は方形を呈するものと思われ、東西の規模は4.2mを測る。検出面からの壁高が最も高いのは北壁で34cmになる。カマドは焼土の残存位置から東壁のやや北寄りに構築されていたと考えられる。ただし、焼土が壁外にも残存していることから通常のカマドでなく、壁外

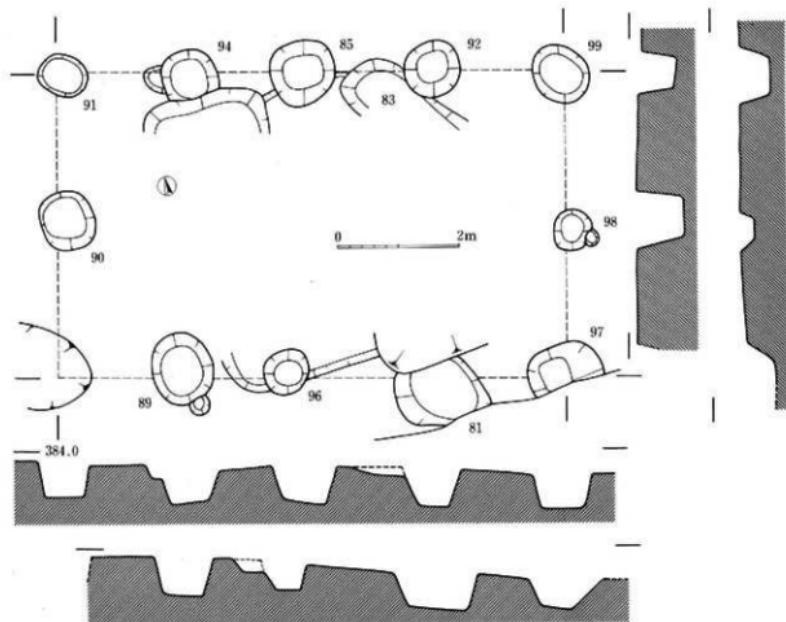
に方形に張り出す突出型カマド形態を推定する。床面は小さな凹凸があり軟弱である。

遺物 (47図) 出土量は少ない。器種には須恵器壺 (1~4)・蓋 (5)・高台壺 (6)、土師器甕 (7)がある。提示した土器はすべてロクロ成形によっている。壺の体部は直線的に外開して口縁部にいたる。底部外面は糸切り痕を残し上底になる。蓋は扁平のつまみが付され、内清度の少ない天井部、屈折直立する口縁部形態になる。天井部の調整は回転ヘラケズリによっている。6は大型で深い壺部に高台が付される。底部外面は平底で回

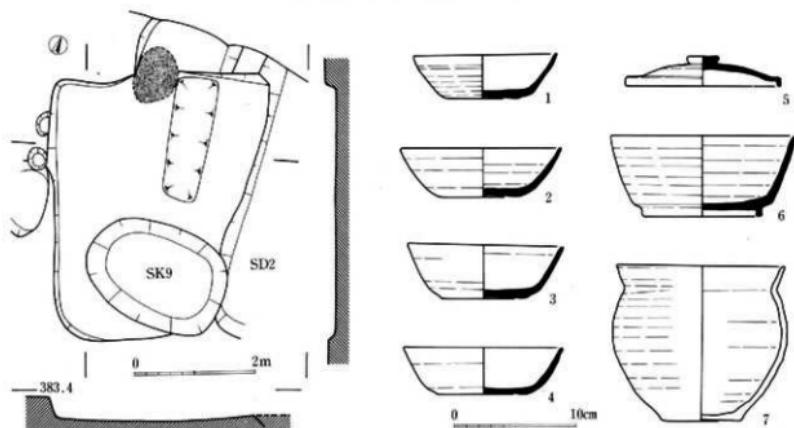


44図 CSB 6 実測図 (1:80)

転ヘラケズリによって調整されている。7は体形を呈するもので、全面にロクロメがみられる。ロクロからの切り離しは糸によっている。



45図 捜立柱建物址実測図 (1 : 80)

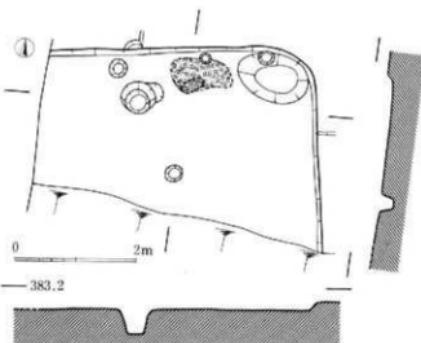


47図 C S B 3 出土土器実測図 (1 : 4)

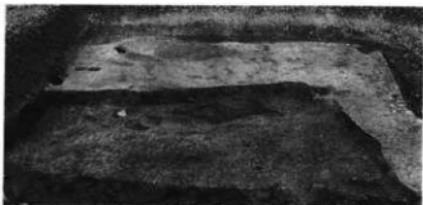
C S B 5

遺構（48図） C区の東端に位置する。S B 4と重複関係にあり、これよりも古い。西側は調査区外に伸びており、南側は防火貯水槽により破壊される。いわば北東の一部を検出したにすぎず、形態が隅丸方形を呈するであろうと推定する以外規模等は不明である。カマドは北壁の東寄りに構築されており、火床の焼土塊および周辺に炭化物の散在が認められた。北東隅には長軸1.2m・深さ30cmを測る卵形の土坑が掘り込まれている。貯蔵穴と考えられる。床面は凹凸がみられるものの堅緻である。

遺物（49図） 出土量は少なく、復元可能なものは須恵器蓋・高台环各1個体にすぎない。蓋の口縁部は嘴状に立ち上がる。环底部は平底で、外面中央に糸切り痕を残す。体部は底部から稜をもって直線的に外開する。



48図 C S B 5 実測図 (1:80)



N-11 C S B 5

C S K 5

遺構（50図） C区西側の土坑群の一つである。形態は隅丸方形を呈し、東西1.1m・南北1.0m・深さ20cmの規模になる。

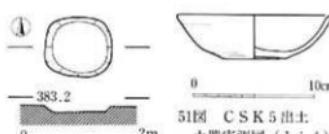
遺物（51図） 覆土中より体部が内湾し、口縁部がわずかに外反する糸切り底の土師器環が1個体出土している。

検出面・他遺構出土の遺物

中世の溝A S D 2から土師器碗（71図38）が出土している。



49図 C S B 5 出土土器実測図 (1:4)



50図 C S K 5 実測図 (1:80)



51図 C S K 5 出土土器実測図 (1:4)

5 中世の遺構と遺物

中世の遺構は土坑および竪穴状遺構が多く、居住施設と考えられるものはない。B区のS B 7と遺構番号を付したものがあるが、調査途上で土坑であることが判明した。遺物を伴い時期が比定できる遺構はA区を中心に多くみられ、C区で大溝（C S D 1）が確認されているにすぎない。この傾向をみると普光寺の参道、通称中央通り寄りに集落の形成がなされていたことが窺える。

ASX 1

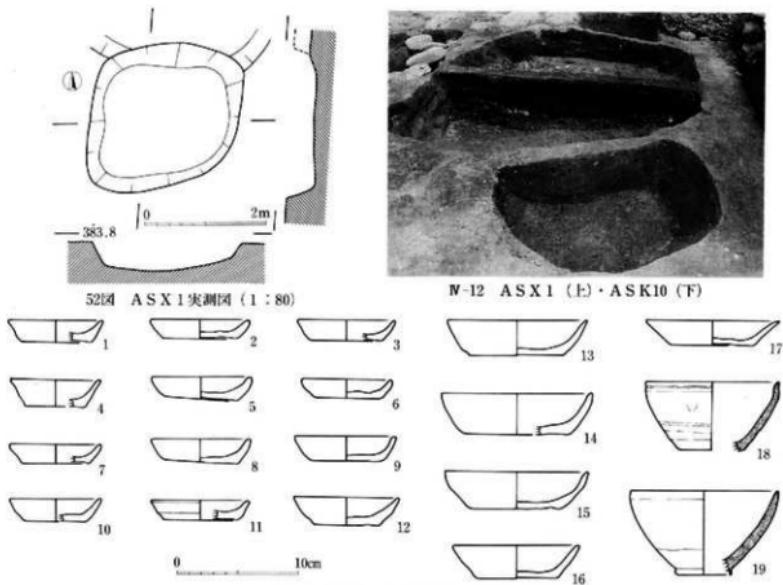
遺構（52図） A調査区の東端に位置し、弥生時代中期の住居址S B 1と該期の土坑SK11と重複する。形態は南北隅が張り出す不整隅九方形を呈する。東西2.45m・南北2.2m・深さ22cmの規模になる。底面は鍋底状になる。覆土は黒灰色砂質土で焼土や炭化物を多含する。竪穴状遺構というよりも土坑的性格が強い。

遺物（53図） 大小2形態の土器皿（カワラケ）と古瀬戸天目茶碗が出土している。土器皿は体部の立ち上がりが直線的のものと内湾するものの2種がみられる。共に成形・調整は稚なロクロによるものであるが、内面底部はナデによって仕上げる特色がある。小型の土器皿は口径が7.5~8.5cm・器高が1.5~2cm前後に集中する。大型のものは口径が10~12.3cm・器高が2~3.4cm内にあるもののばらつきがある。天目茶碗の18は口縁部がつまみ出され外反するが、19は体部から素直に引き出される。釉色は18の外面が黒色を呈し、内面は暗褐色釉に黒色釉が流れる。19は内外面共に黒褐色釉である。この他に砥石（81図15・16）、用途不明の銅製品（82図14）、成平元寶・天聖元寶・至和元寶・嘉祐元寶・元豐通寶・元祐通寶・聖宋元寶等の古錢が出土している。

ASX 4

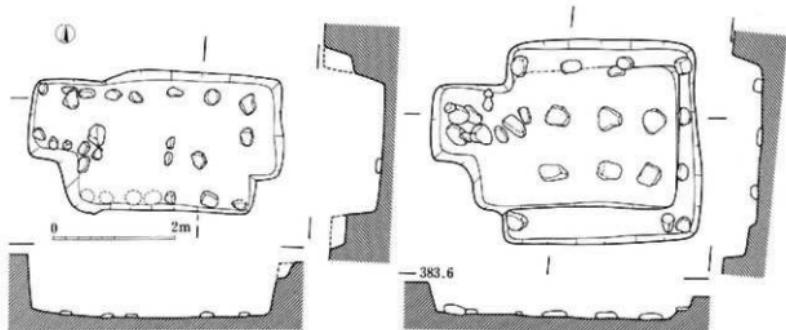
遺構（54図） A区の中央付近に位置し、下面にSD 2がある。遺構は新田2時期に分けられる。

下部の遺構は、大小長方形の遺構を二つ重ねたような凸形態になる。西壁の1.1m程の突出部は入口施設と想定する。規模は東西長軸4.0m・同短軸3.0m・南北長軸2.25m・同短軸1.68mを測り、検出面からの深さは西壁で1.08m、上面遺構からの深さは50cm前後ある。各壁沿い底面には礎石様自然石の配列が認められ、1間0.6m前後間隔の4間×3間の建物址と思われるが、配石芯々間の距離が短いことから高床の東とも考えられる。用途は半地下式の倉庫であろう。



上面の遺構は下面の遺構を埋め、南北方向を拡張する。規模は南北3.35m・東西3.15m・西壁深さ56cm程を測り、形態は方形を呈する。北・南・東壁沿いは幅25~45cm・底面からの高さ8cmのベット状段を形成する。段の外縁は入口施設と接合すること、底面のレベル差が認められないことから長方形掘り込みを意識しているものと思われる。ベット状段および西壁下に礎石が配置されるが、南壁・東壁の一部は抜き取られている可能性が高い。1間0.9m間隔の3間×3間の半地下式建物址を予想する。長方形施設内にも1間×2間の礎石配列を検出するが、外周配列の礎石軸線と一致しない。倉庫址と考えれば高床を支持する束用礎石と考えられる。入口部の集石は階段状施設構築材あるいは抜き取られた礎石の集石と考えられる。覆土は燒土・灰・炭化物混じりの黒褐色砂質土である。底面は叩き締められ堅緻である。

遺物（55図） 下部の遺構からの出土遺物ではなく、提示した土器類はすべて上部遺構からのものである。土器皿（1~11）・古瀬戸鉢皿（12）の上器類、龍泉窯系青磁碗（13）がある。土器皿は底部から体部が直線的に外開する中で2・8は丸底になり、凹凸がある。色調は白褐色のものが多い。小型のものは口径が7cm台に収まり、器高は2cm未満に集中する。鉢皿は平縁の器形で、底部内面にヘラ先により格子目が刻まれる。胎土は白灰色で、内面には灰釉が掛けられている。青磁碗は玉緑で暗オリーブ系の厚い釉が掛けられ貯入がみられる。この他に砾石（81図17~19）と開元通寶・淳化元寶・景德元寶・天禧通寶・天聖元寶・治平元寶・熙寧元寶の古錢が出土している。



54図 AS X 4下面（左）・上面（右）実測図（1:80）



N-13 AS X 4下面



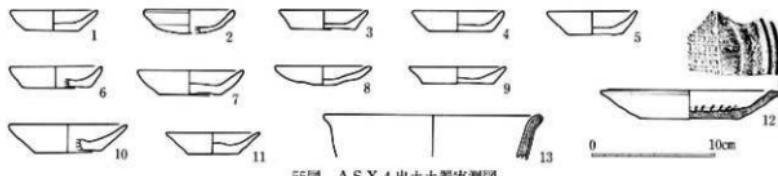
N-14 AS X 4上面・AS B 7（上）



N-15 ASX 4 下面



N-16 ASX 4 上面



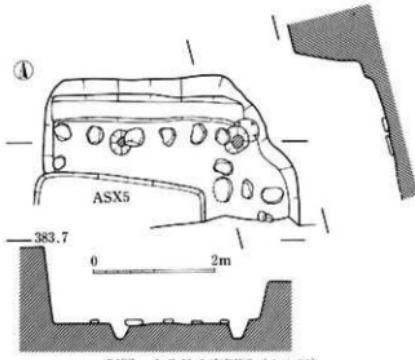
55図 ASX 4 出土土器実測図

ASX 6

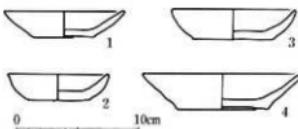
遺構（56図） A区の中央に位置する。南側は調査区外に及び、近世のSX 5と重複関係にある。基本形態は方形を呈するものと思われるが、北壁の入口施設と推定される中央部が突出している。東西4.2m・方形部東西3.65mを測る規模になる。検出面からの掘り込みは西壁が最も深く1.25m程度になる。覆土は軟質の灰黒色砂質土で、焼土・炭化物・灰を多く含み黄褐色粘質土の小粒も混じる。北壁下には幅35cm・底面まで約10cmのベット状の段がみられるが、この部分だけ黄褐色粘質土ブロック混じりの土壤で前述の覆土と相異がある。規模が規模だけに後世の遺構と考えるよりも壁材固定用の意図的な埋土と推測する。底面は平坦で軟弱である。北壁沿いに2個の柱根を残す小穴があり、小屋組の主柱痕と思われる。この柱列と同列および直角に自然石の配石がある。柱痕が主柱とすれば、配石は高床の東用の礎石と考えられる。

柱穴間2.0m、配石間0.4~0.6m・全長2.6mを測る。

遺物（57図） 出土量は少なく、すべて破片である。器種は土器皿で、ロクロ成形である。底部の内面はナデで仕上げている。この他に砥石（81図20・22）、銅製円管（82図11）、多量の古銭が出土している。古銭の錢種は



56図 ASX 6 実測図 (1 : 80)



57図 ASX 6 出土土器実測図 (1 : 4)



N-17 ASK 4・5・6、ASD 2

開元通寶・周通元寶・祥符元寶・景祐元寶・治平元寶・元豐通寶・元祐通寶・政和通寶・永樂通寶である。

ASK 7

遺構（58図） A区の中央付近に位置し、A-2調査区に属する。南壁は近世の井戸址と重複する。調査では調査区外に延びる北壁側の一部を除き露呈した。形態は長方形を呈し、東西5.2m・南北2.25m、南壁高38cm・東壁高32cmの規模になる。中央南寄りで北側に深く10cm程の段を形成する。形態や配石の状況から二つの遺構の重複も考えられる。企画性の配石は南側にみられ、1間約0.6m間隔で南北2間×東西3間の礫石を抽出する。段以北では配列は定かでない。底面は軟弱で、薄い灰層が認められた。

遺物（59図） 出土量は少なく、器種には土器皿（1～4）与中国産青磁碗（5）がある。土器皿には大小2形態ある。青磁碗は淡緑色を呈する釉が底部外面を除き厚く掛けられ、体部外面には唐草文風の彫り込みがみられる。この他に古錢の天祐通寶・紹聖元寶・政和通寶が出土している。

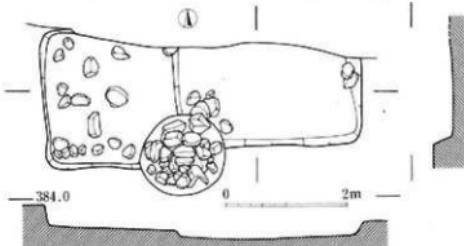
ASK 2

遺構（61図） A区の上面遺構の一つであるが、北側は後世の搅乱により破壊を受ける。遺構確認面は1次面から、遺構の下部は2次面を掘り込む。形態は方形を呈し、東西2.2m・2次検出面からの深さ22cmの規模になる。覆土は灰黒色砂質土で焼土・炭化物を多く含む。南壁下底面に配石様の自然石がみられたが、他壁下の状況は不明である。

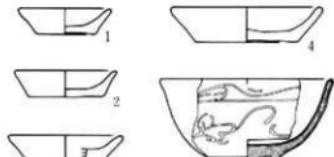
遺物（60図） 出土量は少なく、中世の遺物は土器皿が2個体のみである。この他に古墳時代中期の壺（3）・小型丸底形土器（4～6）が出土している。下部で該期の遺構と重複している可能性がある。この他に熙寧元寶・咸淳元寶の古錢が出土している。



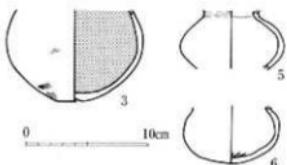
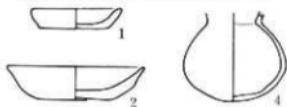
N-18 ASX 5 (右)・6 (左)



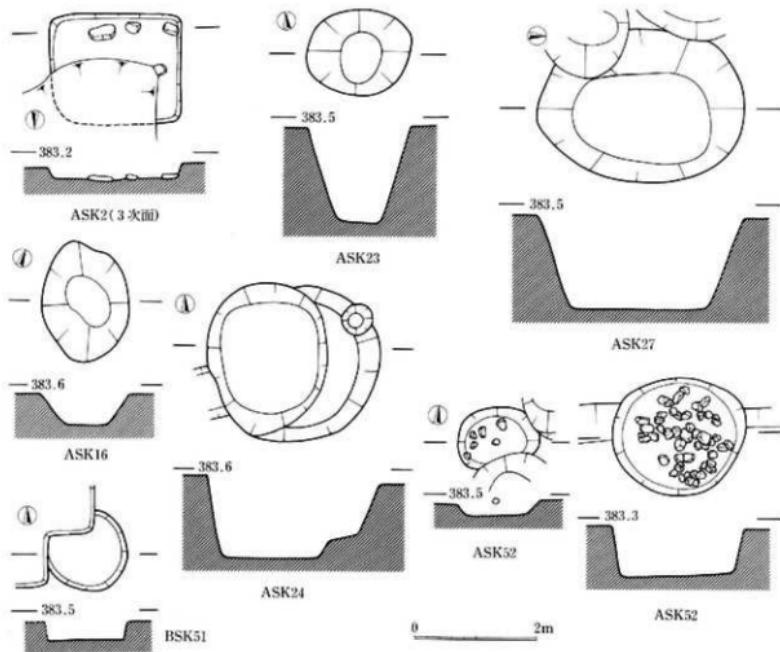
58図 ASX 7 実測図 (1:80)



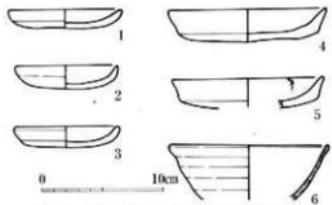
59図 SX 7 出土土器実測図 (1:4)



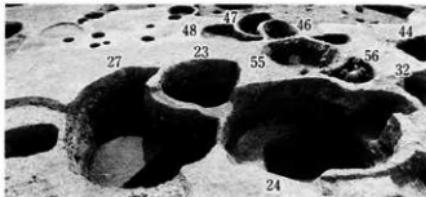
60図 ASK 2 出土土器実測図 (1:4)



61図 中世土坑実測図 (1:80)



62図 ASK16出土土器実測図 (1:4)



N-19 A区中世土坑群

ASK16

遺構 (61図) A区の中央に位置し、SD 2よりも新しい。形態は楕円形を呈し、長軸2.0m・短軸1.45m・深さ50cm程の規模になる。覆土は炭化物を多く含む灰黒色砂質土である。

遺物 (62図) 出土土器には土器皿（1～5）と山茶碗（6）がある。土器皿は共に器高の低い扁平な器形で、体部の器体が底部よりも厚いことが特色としてあげられる。また、器形には大小の2種類があり、底部調整は非クロコのナデでおこない、凹凸があるなど他遺構のものと趣を異にする。6の碗は胎土が白灰色を呈するもので無施釉である。

A SK23

遺構 (61図) A区A-2調査地西側の土坑群の一つである。該期の土坑S K27と重複関係にあり、北側は近代の搅乱(S K22)により一部破壊を受ける。形態は楕円形を呈し、長軸1.55m・短軸1.32m・深さ1.52mの規模になる。覆土は灰黒色砂質土で、底面近くには炭化物・焼土等の薄い互層が認められた。

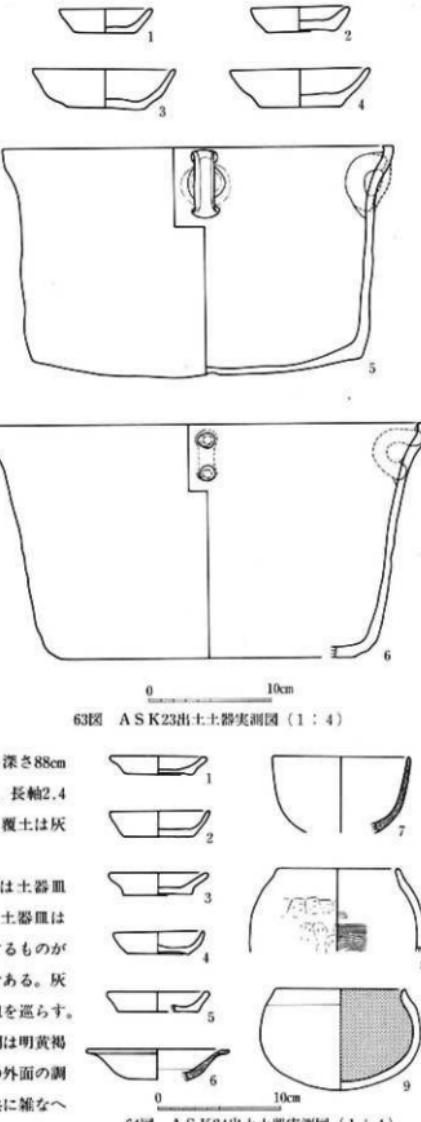
遺物 (63図) 大小2種類の土器皿(1~4)と2個体の内耳土器(5・6)が出土している。土器皿の小型のものは口径が7.5cm・器高2.0cm、大型のものは11cm前後・器高3.1cmの法量である。内耳土器5は部体が直立し、口縁部が外反したのち立ち上がる器形になるのに対し、6の部体は外開する。共に丸底形態で、内耳部は棒状粘土紐を器体に差し込んで接着している。調整は外面がナデによるもので、内面は5がヘラナデを併用し、6は指圧整形後不連続回転ヨコナデで仕上げる。5の底部外面中央に直径2cm程の窪みがあり、支脚受けの痕跡と思われる。この他に用途不明の銅製品(82図10)がある。

A SK24

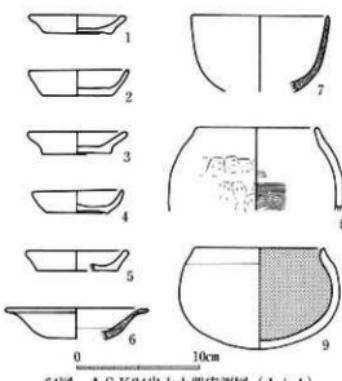
遺構 (61図) S K23の北西に隣接する。

上面形態は円形に近く、東西2.7m・南北2.55m・深さ88cm規模になるが、西壁側はさらに楕円形に掘り込む。長軸2.4m・短軸1.9m・検出面からの深さ1.35mを測る。覆土は灰黑色砂質土で焼土・炭化物を多く含む。

遺物 (64図) 出土量は少ない。該期の器種には土器皿(1~5)、唐津灰釉皿(6)・碗(7)がある。土器皿は小型のもので部体が直線的に外開するものと内湾するものがある。口径が8cm・器高が1.5~2cm前後の法量である。灰釉皿は口縁部が平縁形態になり、内面に1条の沈線を巡らす。胎土は白灰色で、釉色は灰白色を呈する。7の色調は明黄褐色である。8・9は古墳時代後期の鉢である。8の外面の調整はヘラケズリのちヘラナデである。9は内外面共に雜なヘラミガキが施され、内面が黒色処理される。この他に砥石(81図7)が出土している。



63図 ASK23出土土器実測図(1:4)



64図 ASK24出土土器実測図(1:4)

A SK27

遺構（61図） SK23と重複し、SK24と接する。形態は楕円形を呈し、長軸3.35m・短軸2.55m・深さ1.45mの規模になる。覆土はSK24と同様である。

遺物（65図） 出土量は少ない。該期の器種に土器皿（1～3）があるのみである。共に底部外面の調整はナデによっており凹凸を残す。1の口縁部は面取り状になる。小型のものの口径は9.2cmと9.8cm。器高は1.5cmである。大型の3は口径13cm・器高2.6cmである。4・5は古墳時代前期に属する。4は器台脚部で、外面がヘラミガキ調整で3個の円孔が穿たれる。5は口縁部が大きく外反する球形胴の甕である。調整にはハケナデが多用される。この他に景德元寶・熙寧元寶・元豐通寶が出土している。

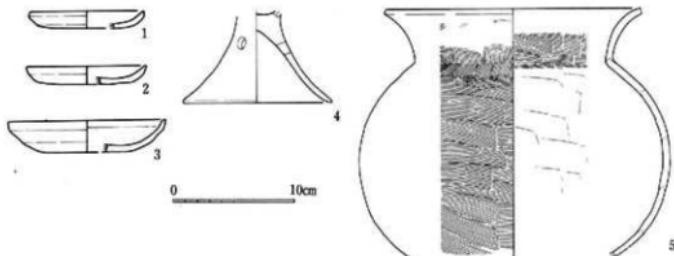
A SK28

遺構（61図） A区のA-2調査区土坑群の一つで、SD2よりも新しい。形態は円形を呈し、東西2.2m・南北1.95m・深さ80cmの規模になる。覆土は炭化物を多含する灰黒色砂質土で、上層に角礫の混入が認められる。底面は平坦である。

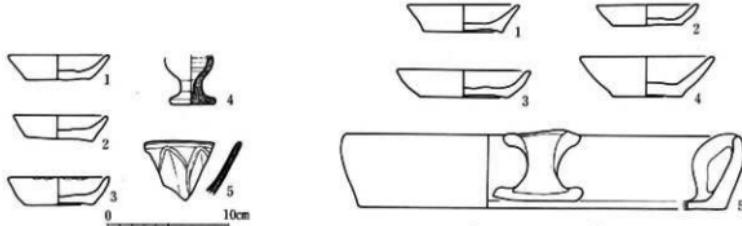
遺物（66図） 出土量は少ない。器種には土器皿（1～3）、古瀬戸仏華瓶（4）、龍泉窯系青磁碗（5）がある。1・3は灯明皿で口縁部に油煙痕を残す。土器皿の口径は8cm前後で、器高2.1cmである。4は外面が灰白色、胎土が白灰色を呈する。5は蓮弁文を彫り出し、厚い緑灰色の釉を掛ける。この他に石硯（81図1）・銅製盃（82図7）・天聖元寶が出土している。

B SB7

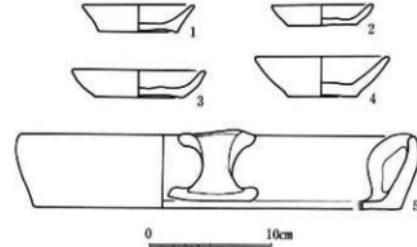
遺構（68図） 住居址番号を付したが性格は土坑である。B区のB調査地西側に位置する。後世の擾乱により南側の掘り込みは明確に確認できなかった。形態は不整な隅丸台形を呈するものと思われ、東西3.7m・南北4.5mを測る。底面は東西方向が東に傾斜を有するものの平坦であり、南北方向は南に傾斜する。覆土は該期の土坑



65図 ASK27出土土器実測図（1：4）



66図 ASK52出土土器
実測図（1：4）



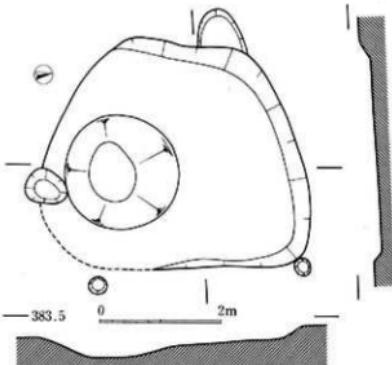
67図 BS B7出土土器
実測図（1：4）

と同様に焼上・炭化物を多含する灰黒色砂質土であり、土器の多くはここからの出土である。

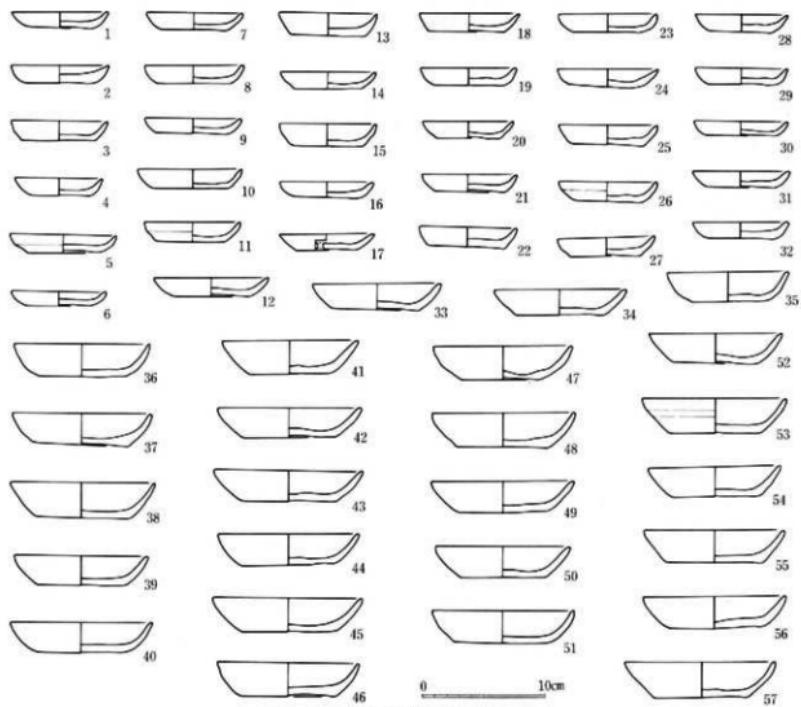
遺物（69図） 完形品を含む多量の土器皿が出土している。口径と器高の法量に差があり、大小に2分することができる。小型品（1～32）は口径7.5～8.5cm・器高2cm未満、大型品（33～57）は口径が10cm後半から11cm代・器高が2cm代の数値に集中する。器形としては口径に対し器高が浅いものがめだつ。調整は体部がヨコナデ、底部内面がナデを基本としている。底部外面には糸切り痕と乾燥糊痕の平行条線を残す。この他に石硯と思われる石製品が出土している（81図4）。

B S K 51

遺構（61図） B区のB-2調査地に位置し、近



68図 BSB 7実測図（1:80）



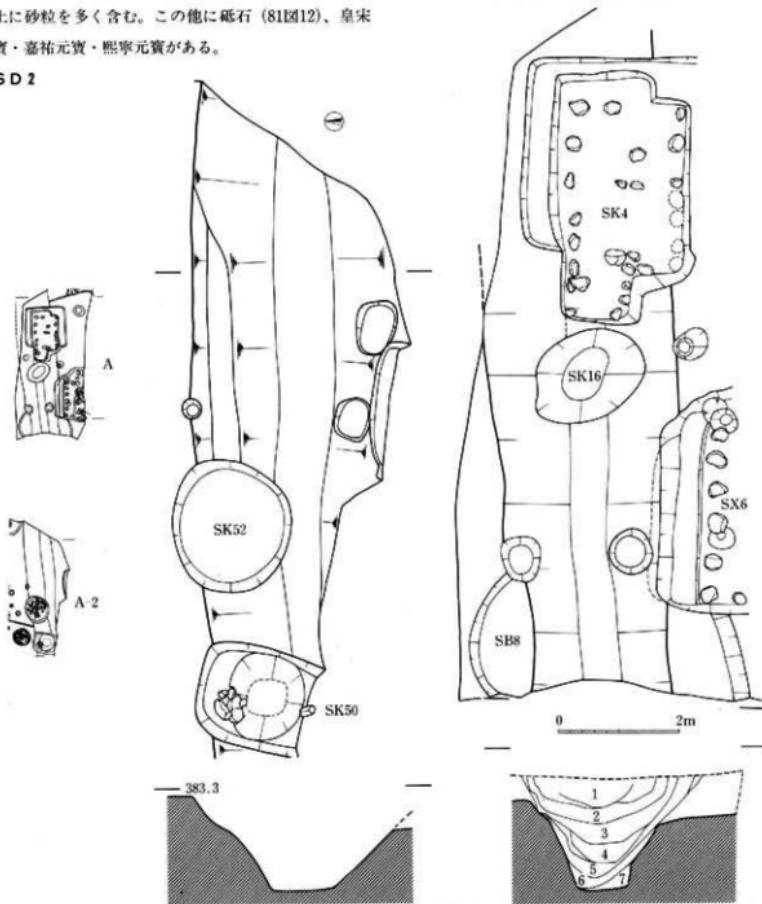
69図 BSB 7出土土器実測図（1:4）

世以降のK50と重複する。形態は円形を呈し、直径1.3m・検出面からの深さ30cmを測る。覆土は焼土・炭化物混じりの灰黒色砂質土である。

遺物(67図) 出土量は少ない。器種には土器皿(1~4)・内耳土器(5)がある。2は灯明皿である。土器皿における口径や器高の平均値は個体数が少なく求められない。内耳土器は焰焼で、X形帶状の内耳を貼付する。体部はヨコナデ、底部外面はヘラケズリ調整である。

胎土に砂粒を多く含む。この他に礎石(81図12)、皇宋通寶・嘉祐元寶・熙寧元寶がある。

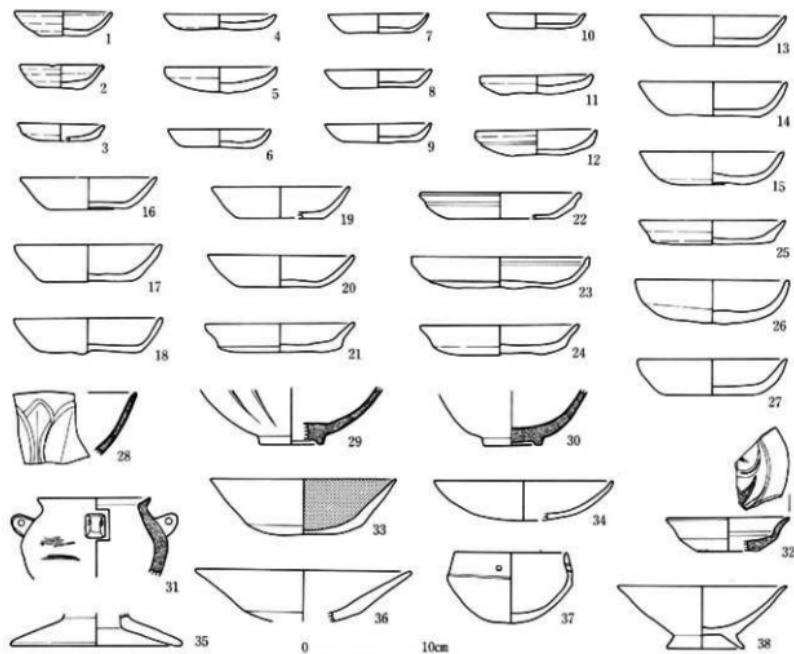
A S D 2



70図 ASD 2 実測図(右A調査地・左A-2調査地)(1:80)

遺構（70図） A区の中央付近、南端に位置する大溝である。上部遺構にS X 4・SK52等がある。幅3.1m・検出面からの深さ1.85m規模のV字形を呈する。南壁の掘り込みは有段になり、下部はU字形をなす。底面の傾斜は地形に添って東から西にある。覆土の基本土壤は灰黒褐色の砂質土であるが、黄褐色粘質土小ブロック粒・黒色土・焼土・炭化物等の混入具合から分層したところ埋没は自然堆積であることがわかった。埋没過程でも規模を縮小しながら溝としての機能を有していたようだ3・4層には小礫を交える。1層は土砂の堆積の乱れが著しく、人為的な埋立て行為をうかがわせる。

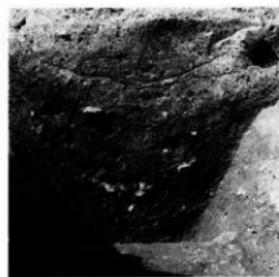
遺物（71図） 大規模な遺構にしては出土量が少ない。該期のものには大小2形態の土器皿（3～27）、山茶碗皿（1・2）、龍泉窯系青磁碗（28～30）、珠洲二耳（？）壺（31）、中国華南産白磁皿（32）の器種がある。この他に砥石（81図23）、元豈通寶・元祐通寶が出土している。土器皿は口径に対し器高が低いことを特色とする。小型のものは口径が8cm代に対し、器高が2cmに満たないものが多い。大型のものも口径が12cm前後にたいし、器高は2cm代の数値に集中する。底部外面の調整にも糸切り痕を残すものと、ナデにより凹凸状の丸味を有するものがある。青磁碗は厚い釉が掛けられ、蓮弁文様の陽刻がある。二耳壺の体部外面には雑な波状文が描かれる。白磁皿の内面は有段をなし、ヘラ先により陰刻が施される。この他に古墳時代後期の土師器環（33・34）・高坪（35・36）・鉢（37）、平安時代の土師器碗が出土している（38）。



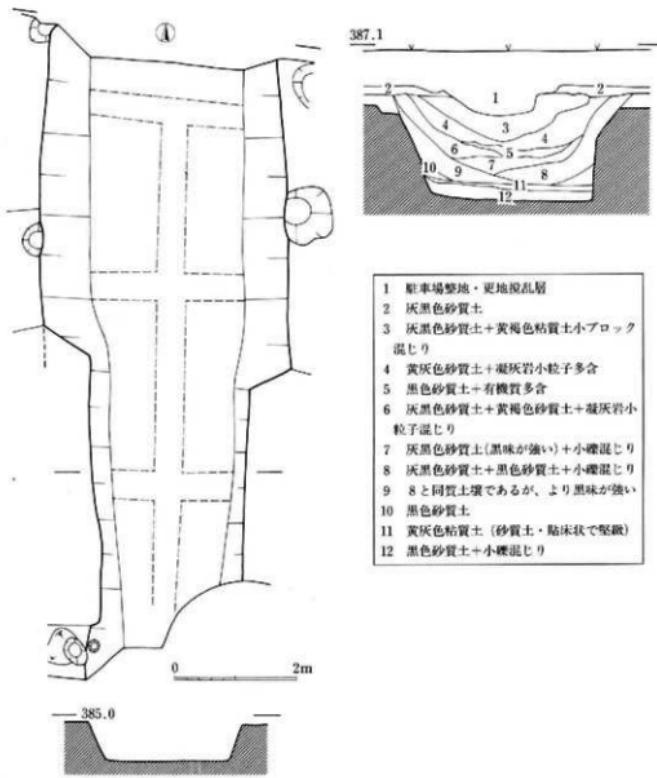
71図 ASD 2 出出土器実測図（1：4）



N-21 ASD 2



N-22 ASD 2 土層



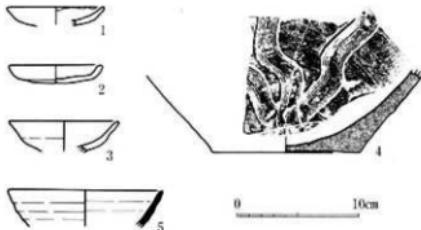
C S D 1

遺構（72図） C区西側に位置し、防火水槽下に残存する程の規模の大きな溝である。溝の断面はU字形を呈し、その規模は上端4.0m・中段3.1m・下端（底）2.5mの幅を有し、深さ1.7m前後を測る。溝はほぼ南北に掘られており、底面は平坦である。最下層（12層）に厚さ約20cmの黒色砂質土、その上層（11層）に8cm前後の黄灰色土が堆積している。前者は掘り込んだ直後の堆積で、後者は溝底面を意識した貼床と考えられる。おそらく機能的には排水の用をなすものであろう。この溝は土層図でみるとおり、自然埋没している。8・9層は崩落による1次堆積層、5層は有機質を多く含み溝理没途上の底面堆積層、2層は田地表層と考えられる。

遺物（73図） 遺構の規模の割りには出土遺物は少ない。該期土器の器種には土器皿（1～3）と須恵質の擂鉢（4）がある。土器皿はロクロからの切り離しを糸切りによっているが、底部が丸味を帯びる点特色がある。1は口縁部に油煙痕が残る灯明皿である。擂鉢は珠洲焼で、擂目を櫛状工具により垂下する蛇行波状文風に刻む。多用されたとみられ内面はすべらかである。5は平安時代の須恵器環である。



N-23 C S D 1



73図 C S D 1出土土器実測図 (1:4)

6 近世の遺構と遺物

近世の遺構は善光寺町の形成と繁栄により多く残っているものと予想したが、善光寺地震に伴う火災後の整地や近代以降の建築物・更地化により破壊を受け残存遺構は少ない。

B S X 3

遺構（74図） B区のB-2調査地に位置する。北に本遺構と同様な石積み遺構S X 3北と重複関係にあり、これよりも新しい。形態は南北内法4.5m・東西内法3.25mの長方形を呈する。石積みは小口の平坦面を内側に揃え、上部と下端部に大きめの石材を使い4段になる。石材の中には五輪塔の地輪が使われている。上段上面には



N-24 B S X 3 (右)・北 (左)



N-25 B S X 3 (北より)

亂れがみられないことから当初の石積み形態と推定する。高さは底面の中央が幾分凹面状を呈しているため80~90cmの規模になる。南東隅に柱材で囲ったと思われる南北1.5m・東西0.9m・深さ20cm程の長方形を呈する意味不明の施設がある。南石積み中央西寄り幅90cmの入口部が設けられ、外方へ石列が続く。床面は軟弱で、礎石の痕跡、柱穴等は認められなかった。小屋組は石列を基礎にしたものであろう。用途は半地下式の倉庫址を想定する。

遺物 特記遺物は出土していないが、覆土には瓦・小砾・炭化物・焼土が多く混入し、ガラス片もみられたことからこの遺構の廃絶を近代に求める。

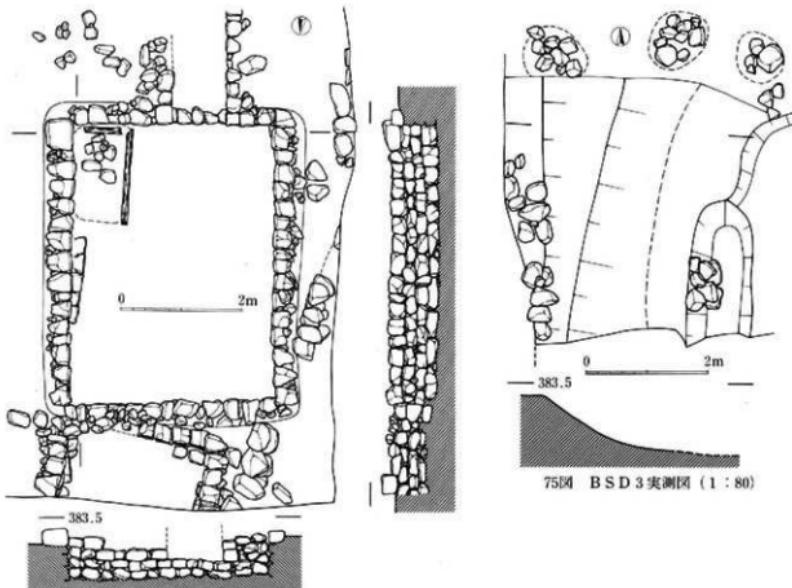
B S X 3 北

遺構 (74図) S X 3 と南東隅で重複する。大部分は調査区外に延びているため詳細については不明であるが、東西内法の規模は2.1mを測る。石積みはS X 3よりも小振りの石材を雜な積み方である。4または5段積みと推定する。南側は石ではなく縦1列に13~15枚の瓦が重ねされていた。いずれも火熱を受け褐色化している。床面は平坦で軟弱である。覆土には瓦・焼土が充満しており、弘化の火災により廢棄されたものと思われる。

遺物 特記遺物の出土はない。

B S K 48

遺構 (76図) S X 3 の東に隣接する。形態は円形を呈し、直径1.0m・深さ20cmの規模である。底面には半切り桶が埋設されていたものと思われ底面に底板が残存していた。中は鉄物砂鉢型が充満していた。隣接するS K 49の遺構と関係するものと思われる。S K 49は長軸85cm・短軸73cmを測る楕円形の掘り方に、内法直径約45cm



74図 B S X 3 (上)・北 (下) 実測図 (1 : 80)

の1段の石列を巡らす。深さは20cm程の浅いものであるが、底面は焼土塊化しており、石列内面も火熱を受けており、焼土が充満していた。溶鉄炉体等の関係資料は出土していない。

遺物（77図）釣鐘状製品を鋳だしたものか、大小2種類の砂鉄型が出土している（1～3）。外面はタテヘラケズリにより6～8面体になる。内面は鋳焼けで溶解し、砂粒が浮き出している。また、内面には桐紋や商標とみられる刻印がある（1・2・4・5）。6～9は半円形を呈し、外縁に突起状飾りを付けた鋳型である。内面は前者同様熱を受け灰黒色を呈する。

B S D 3

遺構（75図）B区のB-2調査地SX3の南に位置する。調査では擾乱が著しく、西肩部のみ確認したにすぎない。規模等は不明である。

遺物（78図）該期の遺物として産地不明の鉄軸無頬壺（2）・伊万里染付碗が出土している。この他に中世の土器皿（1）、古墳時代後期の壺（4）・甕（5）が出土している。



N-26 BSX3（入口部より）



N-27 BSX3北東隅壁



N-28 BSX3北壁



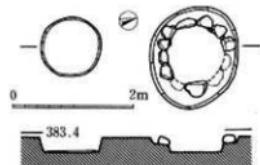
N-29 BSX3入口部



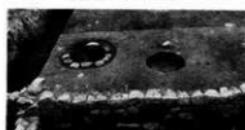
N-30 BSX3北



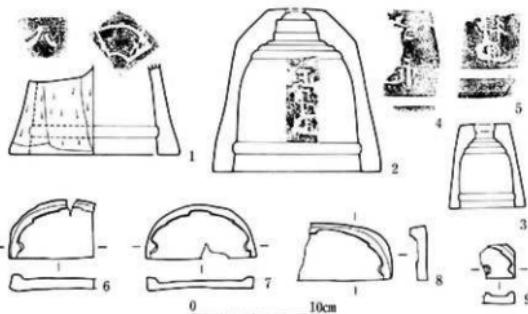
N-31 BSX3北南北隅壁



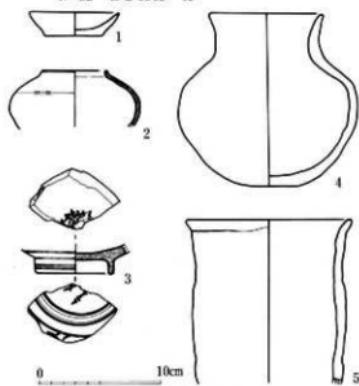
76図 BS K48(左)・49(右)
実測図(1:80)



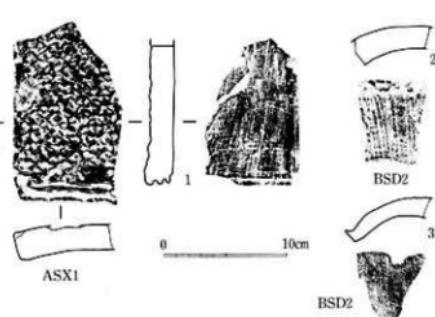
IV-32 BS K48・49



77図 BS K48出土砂鉢型実測図(1:4)



78図 BSD 3出土土器実測図(1:4)

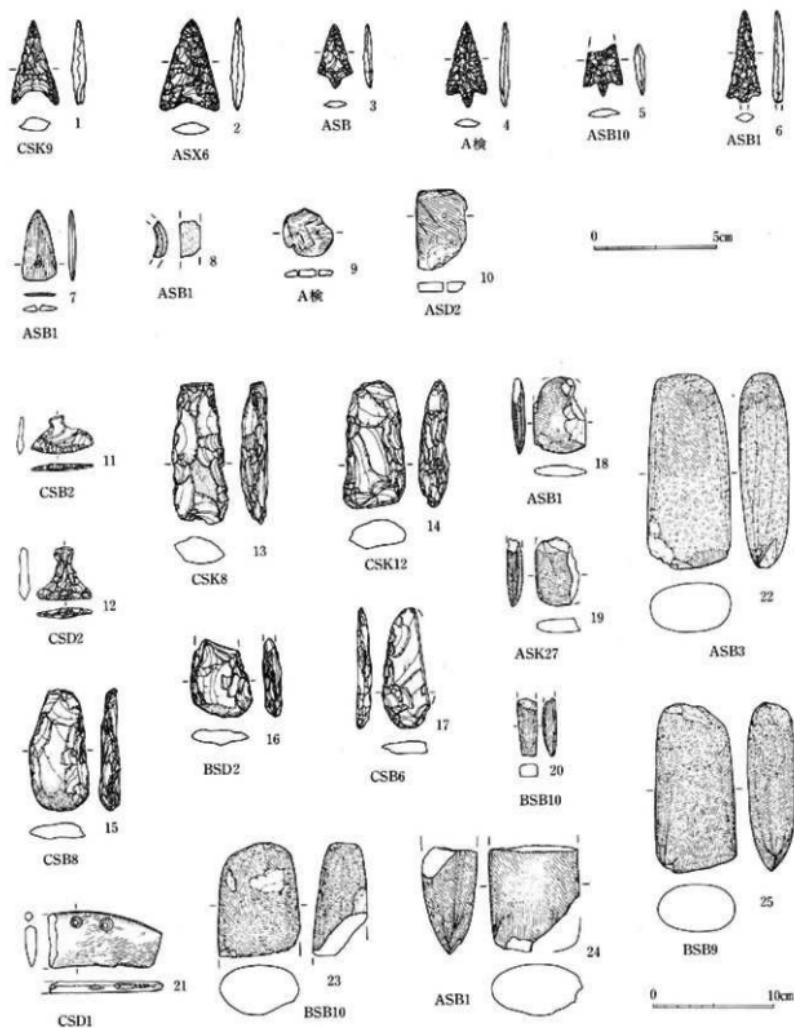


79図 布目瓦実測図・拓影(1:4)

7 特記遺物

- ① 石器・石製品 繩文時代に比定されるものは石鎌(80図1・2)・石匙(11・12)・打製石斧(13~17)がある。繩文時代の遺構が確認されているC区を主体に出土している。石鎌は無茎のもので、剥離は雑で大きい。2はA区からの出土であるが、剥離面に摩耗がみられることから流入品として該期の遺物とした。打製石斧は短骨形(13~14)と撥形(15~17)の2形態がみられる。13は原形に近く刃部が鋭利なのに対し、他は使い込みにより鈍角を呈し、15・16には使用擦痕が認められる。1・13頁岩、2・11チャート、12・14~16安山岩、17硬砂岩。

弥生時代では石鎌(3~7)・扁平片刃石斧(18・19)・方柱状片刃石斧(20)・磨製石包丁(21)・大型蛤刃石斧(22~25)の生産関連用具の他に、内径2.4cmを測る蛇紋岩製指輪とみられる装飾品も出土している。石鎌は打製のもの(3~6)と磨製のもの(7)がある。打製石鎌は有茎のもので、すべてA区の弥生時代遺構分布図からの出土で該期のものとみて間違いかろう。4・6は長身二等辺三角形を呈し、刃部が鋸歯状に剥

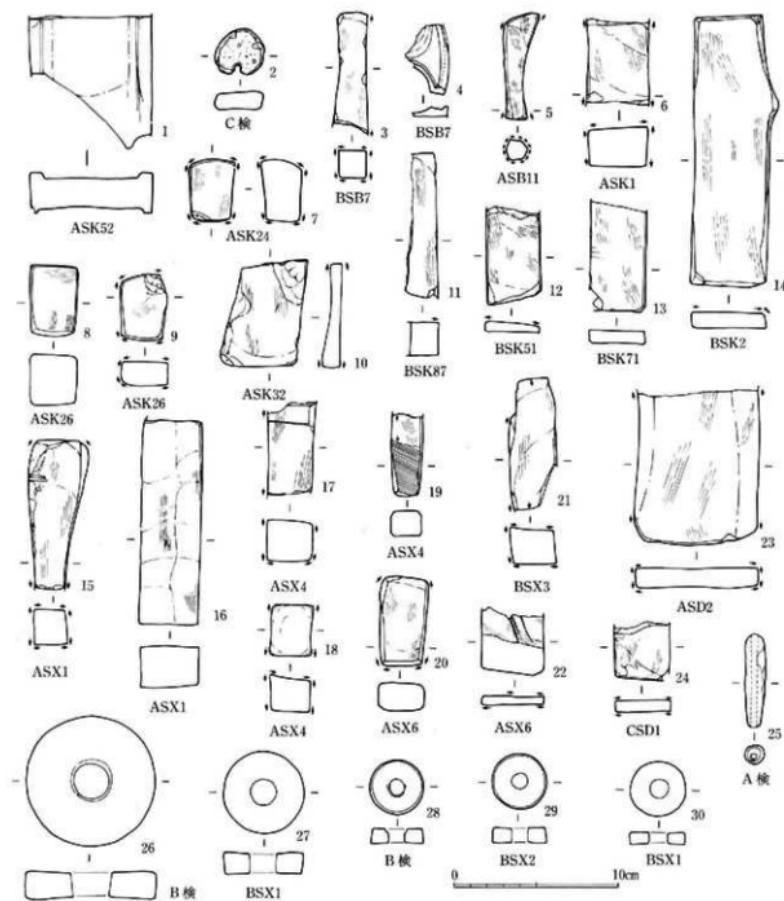


80図 石器・石製品実測図（1～10は1：2、他は1：4）

離されている特色がある。7の両面には箋がみられる。3・5～7チャート、4黒耀石、18・20流紋岩、19硬砂岩、21粘板岩、22～25閃綠岩。

古墳時代では9の有孔円板、10の剣形と思われる滑石製模造品がある。

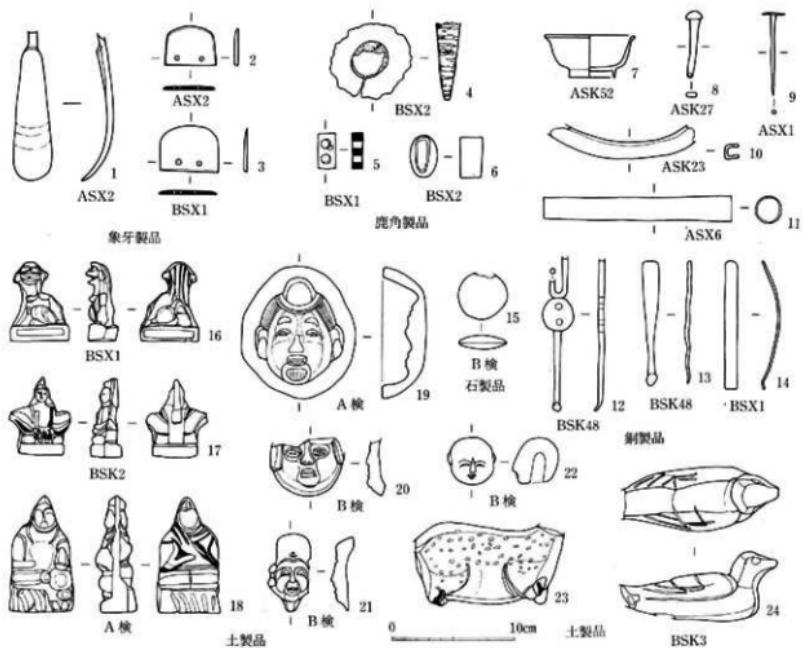
平安時代以降では時期の比定は困難であるが、以下の石製品（81図）が出土している。泥岩製の硯（1）、



81図 石・土・磁器製品実測図 (1 : 3)

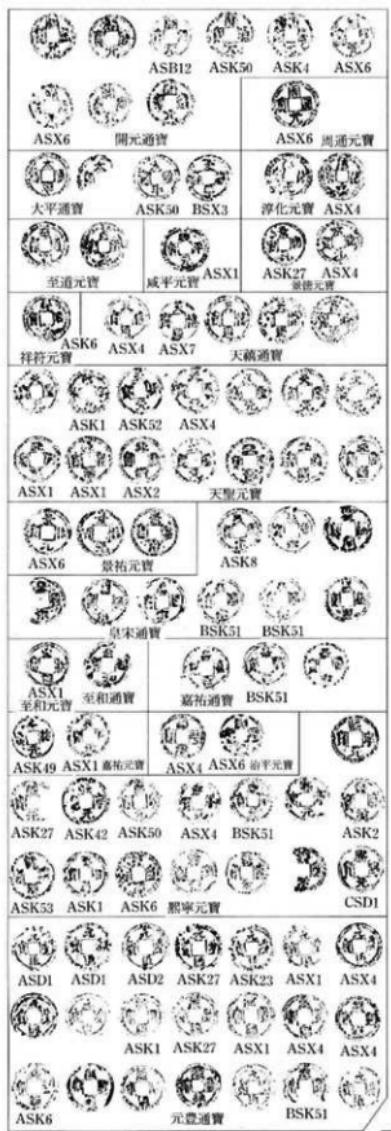
軽石製の浮子(2)、砥石(3~24)、基石(82図15)が出土している。砥石は23の砂岩の他はすべて流紋岩製仕上げ砥である。14・23は置き砥石で、他は持ち砥石である。16は未使用であり、11・14・19には鋸による切断痕が残る。6~9・18・20等の方形状を呈するものは特殊用途が考えられる。

- ② 布目瓦(79図1~3) 内側に布痕が残る瓦である。1は軒平瓦で、外面に型取りと思われる凹凸圧痕がある。瓦当には2条の沈線を入れる。2・3は丸瓦である。共にBSD2からの出土で摩耗が著しい。
- ③ 象牙製品(82図1~3) 茶杓(1)・一对の円孔を穿つピック状製品(2・3)がある。
- ④ 鹿角製品(82図4~6) 側面三角形状に輪切りにした未製品(4)・2個の円孔を穿つ長方形の小型製品(5)・鐘形製品(6)がある。



82図 象牙・鹿角・銅・土製品実測図 (1 : 2)

- ⑤ 銅製品 (82図7~14) 金属製品の出土量は少ない中から銅製品を抽出する。用途のわかるものは7の盃、8・9の釘・12の簪・13の耳搔きがある。
- ⑥ 土製品 (82図16~24) 提示した実測図の製品は鉢型 (19) の他は鉢型による押し形である。16は狛犬・17は神主・18は半跏仏の立体像である。共に難な灰釉や緑色釉が掛けられる。19は翁面の鉢型・20は金太郎 (子供)・21は七福神の布袋を表現する泥面子である。22は子供人形の頭・23は猪・24は鳥の立体像である。これらは善光寺参詣土産品と推定する。この他に土鍾が1個出土している (81図25)。
- ⑦ 磁器製品 (81図26~30) 戸車である。両面に切断痕を残し、灰釉が施される。断面形では内外のどちらかに傾斜を有する特色がある。26は直径が8.1cmを測る大型のもので土蔵用のものであろうか。
- ⑧ 古銭 江戸時代までの銭名が判明できたものの総数230枚のうち永楽通寶以前のものは150枚を数える。鑄造年代順に出土枚数を記すると、唐銭の開元通寶9枚、後周銭の周通元寶1枚、北宋銭の太平通寶4枚、淳化元寶2枚、至道元寶2枚、咸平元寶1枚、景德元寶2枚、祥符元寶1枚、天禧通寶5枚、天聖元寶14枚、景祐元寶3枚、皇宋通寶8枚、至和通寶1枚、嘉祐元寶2枚、嘉祐通寶3枚、治平元寶2枚、熙寧元寶15枚、元豐通寶22枚、元祐通寶11枚、紹聖元寶9枚、元符通寶4枚、聖宋元寶2枚、大觀通寶4枚、政和通寶10枚、金錢の正隆元寶1枚、南宋銭の淳熙元寶2枚、開禧通寶1枚、紹定通寶1枚、淳祐元寶1枚、皇宋元寶1枚、咸淳元寶1枚、明銭の洪武通寶2枚、永樂通寶3枚、江戸時代の寛永通寶78枚、文久永寶2枚がある。



83圖 古錢拓影 (1 : 2)

弥生・古墳時代土器観察表

図 番 号	種 別	器 種	法量(cm)		遺 存	成形・調整等	備考
			口径	底径			
ASB1							
24	1	壺	15.5		1/2	口唇繩文、外面ハケ→ナデ、沈線区画、内面横ヘラミガキ・ナデ	
	2	壺	16.2		ママ	口唇繩文、外面ナデ、沈線・繩文、内面横ヘラミガキ	
	3	壺	17.0		3/4	口唇繩文、外面ハケ、頭部沈線・半月形押引文、内面ハケ→横ヘラ	
	4	壺	13.5		2/3	口唇繩文、外面ハケ、沈線→ヘラミガキ、内面横ヘラミガキ	
	5	壺	14.4		ママ	口唇山形突起4、内外面ヘラミガキ・赤彩	2孔一对
	6	壺			3/4	頸部波状文、沈線、内外面ヘラミガキ・赤彩	
	7	壺			1/3	外面ハケ、頸部沈幕・ヘラ描山形文・繩文、半月形押引文、内面ナデ	
	8	壺			1/2	外面ハケ、頸部沈線・ヘラ描山形文・繩文、内面磨耗	
	9	壺			1/5	外面赤彩・ハケ→ヘラミガキ、頸部沈線・半月形押引文、内面ナデ	
	10	壺			1/2	内外面ヘラミガキ・赤彩、内面ナデ	
	11	壺			3/4	外面ハケ、縦列半月形押引文・垂下波状文、内面磨耗	
	12	壺			2/3	外面ハケ、沈線区画文、内面磨耗	
	13	片口鉢	11.7	6.3	10.3	完 外面ハケ→ナデ、内面ハケ→ナデ	
	14	甕	17.3		1/4	口縁部波状文、頸部波状文、腹部縱羽状文、内面ハケ→ヘラナデ	
	15	甕	19.6		1/3	口唇繩文、頸部～胸部波状文、内面ハケ→ヘラナデ	
	16	甕	25.8		1/5	口唇繩文、頸部～胸部波状文、内面ハケ→ヘラナデ	
	17	甕			1/4	胸部縱羽状文・扇曲列点文、内面ヘラナデ	
	18	土製耳栓			2.2	1/4 内面溝文、赤色顔料充填	繩文後期
BSB9							
26	1	台付甕	12.9	6.1	11.0	1/3 外面頸部～胸部波状文	
	2	台付甕	13.8			1/2 口唇繩文、口縁部繩文地・山形沈線文、頸部～胸部コの字巻ね沈繩文	
	3	甕	20.7	7.0	23.0	3/4 頸部波状文、胸部、縱羽状文、内面ハケ→ヘラミガキ	
	4	鉢	22.0	6.2	6.0	外面赤彩→ヘラミガキ、内面赤彩→ヘラミガキ	
	5	有凹版 直径	3.4			内外面ヘラミガキ・赤彩	浅鉢片?
	6	有凹版 直径	4.0			内外面ヘラミガキ・赤彩	浅鉢片?
	7	有凹版 直径	4.8			外面ヘラミガキ・赤彩	壺片
	8	有凹版 直径	2.7			内外面ヘラミガキ・赤彩	浅鉢片?
ASB10							
28	1	土師 坯	11.3	4.4	14.1	1/4 外面ヘラミガキ、内面ナデ	
	2	土師 壺			1/2	外面ヘラミガキ・赤彩、内面ハケ	
	3	土師 高环	24.0		1/2	内外面ヘラミガキ・赤彩	
ASB11							
30	1	土師 器台	8.3	11.5	7.0	完 环部内外面と脚部外面ヘラミガキ・赤彩、内面ハケ→ヘラミガキ	円孔3
	2	土師 器台	8.8	13.0	9.3	3/4 环部内外面ハケ、脚部外面ハケ→ヘラミガキ、内面ハケ	円孔3
	3	土師 器台	8.8	11.0	8.6	7/8 环部内外面ヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ、内面ハケ	円孔4
	4	土師 器台	8.2	12.2	9.1	6/7 环部外面ヘラミガキ、内面ハケ→ヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ・内面ハケ	円孔3
	5	土師 器台			3/4	环部内外面ヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ	円孔3
	6	土師 器台			4/5	环部内外面と脚部外面ヘラミガキ・赤彩、内面ナデ	円孔3
	7	土師 器台			4/5	环部内外面と脚部外面ヘラミガキ・赤彩、内面ハケ	円孔3
	8	土師 器台			ママ	环部内面ヘラミガキ、脚部外面ヘラミガキ、内面ハケ	円孔4

図番号	番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	成形・調整等	備考
				口径	底径	器高			
30	9	土師	器台		11.6			脚部外面へラミガキ・赤彩、内面ハケ	円孔3
	10	土師	高杯	11.7	9.2	7.2	完	环部内外面と脚部外面へラミガキ・赤彩、内面ハケ	
	11	土師	甌	15.0	2.2	9.2	3/5	内外面ナデ、粘土紐成形痕、底部穿孔1	
	12	土師	深鉢	12.2	6.9	12.3	1/2	内外面ナデ、内面粘土紐成形痕	
	13	土師	鉢	15.3	6.3	7.3	完	外面ハケ、内面ハケ→ナデ	
	14	土師	鉢	11.8	1.8	6.1	1/4	内外面ハケ	
	15	土師	鉢	11.4		6.0	3/5	外面へラケズリ→ナデ、内面ハケナデ	
	16	土師	鉢	8.6	2.8	11.9	1/2	外面へラミガキ・赤彩、内面ナデ	
	17	土師	鉢	12.6	6.0	11.4	7/8	外面ハケ、内面ハケ・ヘラナデ	
	18	土師	鉢	15.8	5.1	16.0	3/4	外面ハケ、内面ハケ・ナデ	
	19	土師	壺	10.4			1/2	外面ハケ、内面へラミガキ・ナデ	
	20	土師	壺	26.2	6.7	32.4	7/8	外面へラミガキ・赤彩・直線文T文字文、口縁部赤彩、内面ハケ・ナデ	
	21	土師	壺			6.5	1/2	外面ハケ→へラミガキ、内面ハケ	
31	22	土師	壺	15.2			1/2	内外面ハケ	
	23	土師	壺	24.0			1/2	内外面ハケ	
	24	土師	甌	19.5			4/5	内外面ハケ	
	25	土師	甌	15.8	4.8	17.2	1/2	外面ハケ、内面ハケ→ナデ、口唇面取り	北陸系
	26	土師	台付甌	14.9	8.6	27.0	1/2	口縁部内外ナデ、外面ハケ、内面頸部、脇部ナデ	
	27	土師	甌	16.5			2/3	内外面ハケ	
	28	土師	甌	22.0			1/3	内外面ハケ	
	29	土師	甌	18.2			1/2	外面ハケ、内面ナデ	
	30	土師	甌	18.4	4.9	23.0	1/2	口唇面取り、外面ハケ→ヘラケズリ→ナデ、内面ナデ	北陸系
ASB4									
33	1	土師	壺	11.8	3.2	5.5	1/3	内外面ハケ→ナデ	
	2	土師	小形壺		5.6		2/3	内外面ハケ	
	3	土師	小形壺	8.8		10.4	7/8	内外面ハケ	
	4	土師	高壺	24.0			1/4	内外面へラミガキ	
	5	土師	高壺	17.4			1/3	内外面へラミガキ	
	6	土師	高壺	20.6			3/4	内外面ハケ→へラミガキ	
	7	土師	高壺	17.5			1/2	内外面へラミガキ	
	8	土師	高壺	18.0			1/4	内外面ハケ→へラミガキ	
	9	土師	高壺	18.0			1/2	外面ハケ→へラミガキ、内面へラミガキ	
	10	土師	高壺		18.8		1/4	外面ハケ→へラミガキ、内面ハケ	
	11	土師	高壺		12.4		1/3	外面へラミガキ、内面ナデ	
	12	土師	高壺		12.2		7/8	外面へラミガキ、内面ナデ	
	13	土師	高壺		14.4		7/8	外面へラミガキ、瓶部ハケ→へラミガキ、内面ハケ	
	14	土師	甌	18.6			1/3	内外面ハケ	
	15	土師	甌	20.4			2/3	外面ハケ、内面ハケ→ナデ	
	16	土師	甌				1/3	外面へラミガキ、内面ナデ	
	17	土師	甌		2.8		1/3	外面ハケ・ヘラケズリ、内面ハケ	
ASB7									
35	1	土師	壺	12.6		4.4	1/4	内外面へラミガキ、底部へラナデ	
	2	黒色	壺	12.4	6.6	4.1	完	底部外面へラケズリ、内面へラミガキ・黒色	

団番号	番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	成形・調整等					備考
				口径	底径	器高							
35	3	土師	环	12.8		7.3	1/4	外面ヘラミガキ					
	4	土師	环	14.4			1/4	外面ヘラミガキ					
	5	土師	小形埴				完	外面ヘラナデ					
	6	土師	小形埴				ママ	外面ヘラミガキ、底部ヘラケズリ→ヘラナデ、内面ナデ					
	7	土師	深鉢	18.3			1/4	外面ヘラケズリ、内面ナデ					
ASB10													
36	1	黒色	环	10.9		4.1	完	外面ヘラミガキ、内面黒色					
	2	須恵	环	11.3		4.0	1/2	底部ヘラケズリ					陶邑 TK209
	3	土師	高环	16.5	11.9	14.2	3/4	环部外面ハケ→ヘラミガキ、内面ヘラミガキ					
	4	土師	鉢	13.2			1/6	口縁部外面ヨコナデ、内面ヘラナデ					
ASB13													
37	1	黒色	环	14.0			3/4	外面ヘラミガキ、底部ヘラケズリ、内面黒色					
	2	黒色	环	14.2		7.5	1/4	外面ハケ→ヘラナデ、内面黒色					
	3	黒色	环	15.1		5.1	3/4	外面ヘラケズリ、内面ヘラミガキ・黒色					
	4	黒色	环	13.8		4.2	1/3	外面ヘラミガキ、内面黒色					
	5	黒色	高环	16.8	10.6	16.5	3/4	外面ヘラミガキ、环部内面ヘラミガキ・黒色					
	6	土師	甕	10.4	6.4	14.0	完	外面ハケ→ナデ、内面ナデ・ヘラナデ					
	7	土師	甕	18.8			ママ	外面ヘラケズリ、内面ハケ					
	8	土師	甕	18.8			1/3	外面ヘラケズリ、内面ハケ					
	9	土師	甕	17.8			ママ	外面ヘラケズリ、内面ハケ					
	10	土師	甕	17.2			ママ	外面ハケ					
BSB14													
40	1	土師	甕	18.0			3/4	外面ハケ→ヘラナデ、内面ハケ					

古代・中世遺構出土土器類遺物観察表

団番号	番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項	団番号	番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項
				口径	底径	器高							口径	底径	器高		
BSB8									47	6	須恵	高环	15.1	9.8	6.6	完	
42	1	須恵	环	13.4	6.5	4.0	完	底ヘラケズリ		7	土師	甕	13.8	6.7	12.8	3/4	
	2	須恵	甕	21.1	17.4	4.3	1/2	底ヘラケズリ	CSB5								
CSB6									49	1	須恵	蓋	17.2				1/2
43	1	須恵	蓋	14.1			4/5			2	須恵	高环	14.4	9.6	6.3	2/3	
	2	須恵	环	14.7	8.6	4.0	1/2	底糸切り	CSK5								
	3	黒色	环	13.8	8.0	5.1	完	底ヘラケズリ	51	1	土師	环	12.8	5.0	3.6	1/5	
	4	須恵	甕				1/4		ASX1								
	5	須恵	甕	10.7		1/2			53	1	土器	甕	7.8	5.6	1.8	1/4	
CSB3									2	土器	甕	8.0	6.0	1.6	1/4	タナ	
47	1	須恵	环	11.8	6.0	3.6	完			3	土器	甕	8.0	5.8	1.7	1/4	
	2	須恵	环	13.2	6.5	4.0	1/3			4	土器	甕	7.5	5.0	1.8	1/4	
	3	須恵	环	12.7	7.1	4.4	3/4			5	土器	甕	8.1	5.9	2.0	3/4	
	4	須恵	环	13.1	7.4	3.8	1/2			6	土器	甕	8.3	5.6	1.6	完	
	5	須恵	蓋	12.8	2.7	2.4	5/6			7	土器	甕	7.5	5.6	1.6	1/4	

区番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項	区番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項		
			口徑	底径	器高						口徑	底径	器高				
53	8	土器	皿	8.1	6.0	2.0	3/4	タナ	60	4	土器	小形丸底			1/3	古墳時代	
	9	土器	皿	8.5	5.8	2.1	完			5	土器	小形丸底			ママ	古墳時代	
	10	土器	皿	7.5	5.0	1.8	1/2			6	土器	小形丸底			1/2	古墳時代	
	11	土器	皿	8.1	6.1	1.6	1/4									ASK16	
	12	土器	皿	8.6	5.3	2.3	完		62	1	土器	皿	9.2	1.6	1/2		
	13	土器	皿	11.3	7.7	2.9	1/4	タナ		2	土器	皿	8.3	1.9	完	灯明皿	
	14	土器	皿	12.3	8.5	3.4	1/4	タナ		3	土器	皿	8.4	1.7	完		
	15	土器	皿	11.6	7.0	3.1	1/3	タナ		4	土器	皿	13.0	2.7	完		
	16	土器	皿	10.4	6.6	2.7	1/8			5	土器	皿	12.4		1/3		
	17	土器	皿	10.8	6.5	2.0	1/6			6	陶器	碗	13.0		1/4	山茶碗	
	18	陶器	碗	11.0	4.5		1/6	古瀬戸天目茶碗								ASK23	
	19	陶器	碗	12.0	4.5	6.9	1/3	古瀬戸天目茶碗	63	1	土器	皿	7.5	4.9	2.0	完	
										2	土器	皿	8.0	5.5	2.0	完	
																ASX4	
55	1	土器	皿	7.1	4.3	1.7	1/2	灯明皿、タナ		3	土器	皿	10.5	6.1	3.2	1/2	
	2	土器	皿	7.2		2.0	1/6			4	土器	皿	11.3	6.6	3.1	完	
	3	土器	皿	7.2	5.2	1.6	完			5	土器	内耳	32.0	26.8	18.8	1/6	
	4	土器	皿	7.4	5.0	1.7	3/4	灯明皿		6	土器	内耳	36.0	24.0	19.2	1/6	
	5	土器	皿	7.3	4.3	1.9	完	タナ								ASK24	
	6	土器	皿	7.5	5.3	1.8	1/3	灯明皿	64	1	土器	皿	7.8	5.3	1.5	1/4	
	7	土器	皿	8.6	5.0	2.0	1/3			2	土器	皿	8.0	5.6	2.1	完	
	8	土器	皿	7.8		1.5	1/4			3	土器	皿	8.0	5.4	2.0	完	
	9	土器	皿	7.8	5.7	1.4	3/4	タナ		4	土器	皿	7.3	4.9	1.4	1/2	
	10	土器	皿	9.8	5.4	2.2	1/4			5	土器	皿	8.3	6.5	1.6	1/3	
	11	土器	皿	7.6	4.1	1.8	1/3	タナ		6	陶器	碗	11.5			1/8	
	12	陶器	鉢	14.6	7.9	2.3	1/6	古瀬戸・内面灰釉		7	陶器	碗	12.4			1/4	
	13	青磁	碗	17.6			1/8	龍泉窯系・蓮弁文		8	土器	鉢	9.9			1/6	
										9	黑色	鉢	10.6	8.3	1/8	古墳時代	
57	1	土器	皿	9.8	5.1	2.1	1/4									ASK27	
	2	土器	皿	8.2	4.9	2.1	1/2		65	1	土器	皿	9.2	1.4	1/3		
	3	土器	皿	11.1	6.5	2.4	1/3	タナ		2	土器	皿	9.8	1.5	1/4		
	4	土器	皿	13.0	7.4	2.9	1/8	タナ		3	土器	皿	13.0	2.6	1/4		
										4	土器	高環		12.2	2/3	古墳時代	
59	1	土器	皿	7.5	4.7	2.1	1/3			5	土器	甕	21.0		1/3	古墳時代	
	2	土器	皿	8.2	5.9	2.2	完	灯明皿、タナ								ASK52	
	3	土器	皿	9.0	5.7	1.4	1/3		66	1	土器	皿	8.2	5.2	2.1	完	
	4	土器	皿	12.1	8.4	2.9	1/3	タナ		2	土器	皿	7.3	5.5	2.1	完	
	5	青磁	碗	14.3	5.3	7.2	1/6	中国産・唐草文		3	土器	皿	8.3	5.6	2.2	完	
										4	陶器	佐瓢		3.6	ママ	古瀬戸	
60	1	土器	皿	7.3	5.5	1.2	3/4	灯明皿、タナ		5	青磁	碗				ママ	
	2	土器	皿	11.6	5.7	2.7	1/6									BSK51	
	3	土器	壺					ママ 古墳時代	67	1	土器	皿	9.1	6.3	2.2	1/3	

団番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項	団番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項	
			口徑	底径	器高						口徑	底径	器高			
67	2	土器	8.1	5.5	1.7	1/2	灯明皿、タナ	69	37	土器	11.4	7.6	1.8	完	タナ	
	3	土器	10.8	7.2	2.2	1/4	タナ		38	土器	11.7	7.6	2.9	2/3	タナ	
	4	土器	10.8	5.6	2.3	此マツ			39	土器	10.8	7.2	2.4	1/4		
	5	土器	32.2	30.2	6.1	1/4	焰烙		40	土器	11.5	7.0	2.5	1/3		
BSB7																
69	1	土器	7.8	5.0	1.9	完	タナ		41	土器	11.0	6.5	2.7	完	タナ	
	2	土器	7.9	5.5	1.5	完	タナ		42	土器	11.6	7.4	2.4	完	灯明皿、タナ	
	3	土器	7.9	6.0	1.7	完			43	土器	12.0	7.7	2.5	1/3	タナ	
	4	土器	7.2	4.7	1.5	1/2	タナ		44	土器	11.5	7.5	2.5	1/2		
	5	土器	7.3	5.7	1.6	2/3	タナ		45	土器	12.2	7.6	2.8	3/4		
	6	土器	7.7	5.2	1.3	完	タナ		46	土器	11.5	7.8	2.7	2/3	タナ	
	7	土器	7.6	5.5	1.4	完	タナ		47	土器	11.3	6.4	2.7	1/3		
	8	土器	7.8	6.0	1.5	完	タナ		48	土器	11.5	7.4	2.9	完	タナ	
	9	土器	7.7	5.7	1.3	完	タナ		49	土器	11.5	7.2	2.6	1/2		
	10	土器	7.4	6.0	1.6	1/2			50	土器	11.0	6.9	2.5	1/3	タナ	
	11	土器	7.7	5.5	1.7	1/2			51	土器	11.5	7.5	2.7	3/4		
	12	土器	7.3	6.0	1.5	2/3			52	土器	10.8	7.0	2.5	1/2	灯明皿	
	13	土器	7.9	6.0	1.9	1/3			53	土器	11.8	7.3	2.8	1/3		
	14	土器	7.7	5.5	1.4	完	タナ		54	土器	10.8	7.2	2.4	1/4		
	15	土器	7.7	5.6	1.8	完			55	土器	11.5	7.8	2.7	1/3		
	16	土器	7.5	4.9	1.4	1/2	タナ		56	土器	11.6	7.5	2.6	完	タナ	
	17	土器	7.7	4.8	1.4	1/3	焼成後穿孔、タナ			57	土器	12.3	7.5	2.9	完	
ASD2																
18	土器	8.1	6.1	1.5	3/4	タナ		71	1	陶器	7.9	3.8	2.0	1/4	山茶碗	
19	土器	7.7	5.7	1.4	完	タナ			2	陶器	6.8	3.9	2.0	完	山茶碗・片口	
20	土器	7.4	5.1	1.4	完	タナ			3	土器	7.0		1.4	1/3		
21	土器	7.5	5.5	2.0	3/4	タナ			4	土器	9.1	6.8	1.8	1/3		
22	土器	7.9	6.2	1.7	3/4				5	土器	9.0		2.2	完		
23	土器	7.9	5.4	1.5	完	タナ			6	土器	8.4	5.7	1.6	完	タナ	
24	土器	8.1	4.5	1.6	完	タナ			7	土器	8.2	5.3	1.6	1/2		
25	土器	8.0	5.9	1.7	完				8	土器	8.6	6.1	1.5	完		
26	土器	8.0	5.3	1.7	1/2				9	土器	8.6	5.9	1.5	3/4		
27	土器	8.0	5.7	1.6	1/2				10	土器	8.0	6.3	1.7	1/4		
28	土器	7.5	4.9	1.5	3/4	タナ			11	土器	9.1		1.6	完		
29	土器	7.6	5.3	1.4	完	タナ			12	土器	9.9		2.1	完		
30	土器	7.8	5.7	1.2	1/2				13	土器	12.0	7.0	2.5	1/4	タナ	
31	土器	8.0	5.5	1.4	完				14	土器	12.1	7.5	2.9	完	タナ	
32	土器	7.8	5.3	1.4	完	タナ			15	土器	11.8	6.3	2.7	1/4		
33	土器	10.3	6.9	2.2	完	灯明皿			16	土器	11.0	6.9	2.6	1/4	タナ	
34	土器	10.7	7.0	2.1	完	灯明皿			17	土器	12.0	7.3	3.1	1/4		
35	土器	9.9	5.8	2.5	1/3	灯明皿			18	土器	12.0	8.2	3.9	3/4		
36	土器	10.9	7.0	2.7	1/3				19	土器	11.1	7.0	2.6	1/4		

団番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項	団番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項		
			口徑	底径	器高						口徑	底径	器高				
71	20	土器	皿	11.9	6.5	2.6	1/3		71	33	土師	坪	15.1	4.5	3/4	古墳時代	
	21	土器	皿	12.2		2.4	1/4			34	土師	坪	14.5	3.3	1/3	古墳時代	
	22	土器	皿	13.0	8.8	2.2	1/3			35	土師	高坪	13.9		1/2	古墳時代	
	23	土器	皿	14.5		2.6	1/3			36	土師	高坪	17.6		3/4	古墳時代	
	24	土器	皿	13.0		2.4	1/3			37	土師	鉢	9.2	5.9	3/4	古墳時代	
	25	土器	皿	12.0	10.0	1.9	1/4			38	土師	横	14.0	6.1	5.1	1/5	平安時代
	26	土器	皿	12.5		3.6	1/2			CSD1							
	27	土器	皿	12.3	7.6	2.9	3/4			73	1	土器	皿	8.0		1/4	灯明皿
	28	青磁	碗					ママ	龍泉窯系・蓮弁文	2	土器	皿	7.6	6.0	1.5	1/3	
	29	青磁	碗		5.1			1/3	龍泉窯系・蓮弁文	3	土器	皿	9.0			1/4	
	30	青磁	碗		4.6			1/2	龍泉窯系・蓮弁文	4	陶器	摺鉢		12.2		1/4	株洲
	31	陶器	二耳壺	9.2					珠淵・外面波状文	5	須惠	坪	12.6			1/4	
	32	白磁	皿	10.0	4.9	2.7	1/6	中国華南產・陰刻									

近世遺構出土遺物観察表

団番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項	団番号	種別	器種	法量(cm)			遺存	特記事項	
			外径	内径	型高						口徑	底径	器高			
BSK48																
77	1	砂製	錫型	14.0	13.0		1/3	記号印刻	78	1	土器	皿	7.5	4.8	1.9	1/2
	2	砂製	錫型	12.7	13.0	13.1	1/3	商標印刻		2	陶器	壺?	5.3			1/2 鉄釉
	3	砂製	錫型	6.3	4.3	6.8	1/4			3	磁器	碗		6.4		ママ 伊万里染付
	6	砂製	錫型	(10.2)	(8.6)	4.9	ママ			4	土師	壺	9.4	4.4	14.0	1/3 古墳時代
	7	砂製	錫型	9.0	8.1	4.4	完			5	土師	甕	12.5			1/4 古墳時代
	8	砂製	錫型	(13.6)	(12)	4.6	ママ									

B S K29



A S B1



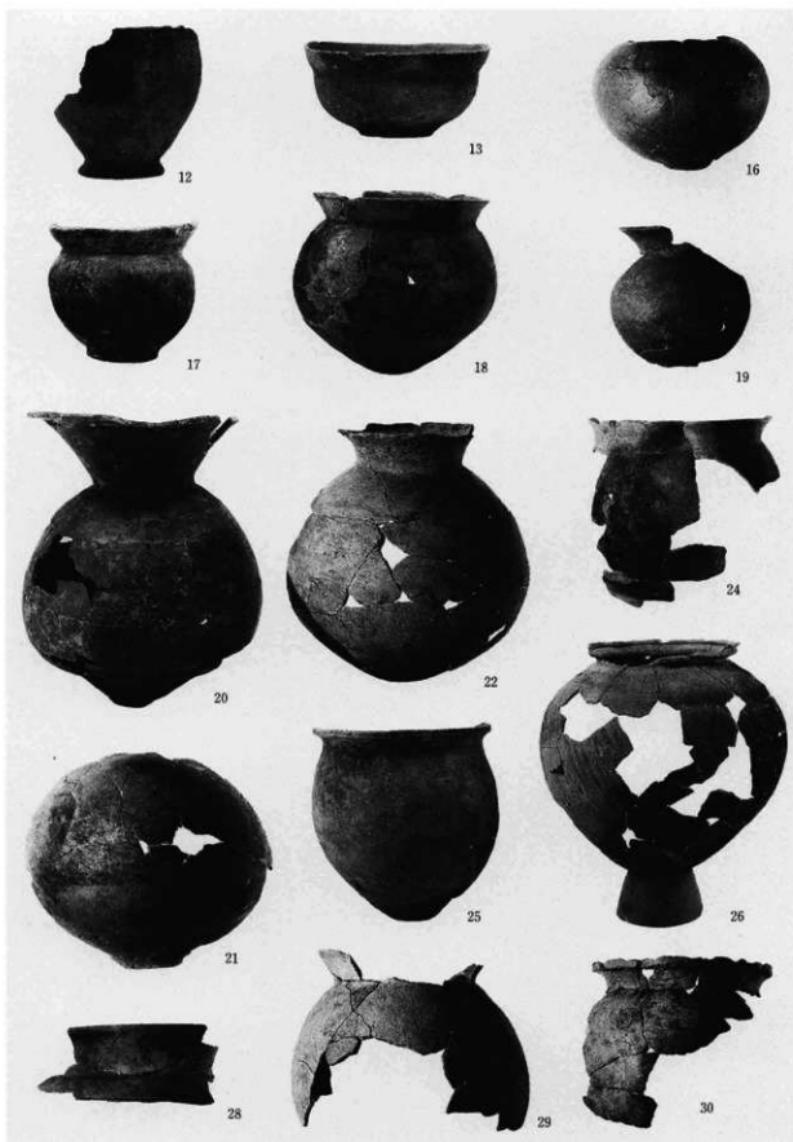
B S B9



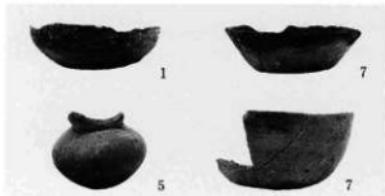
A S B11



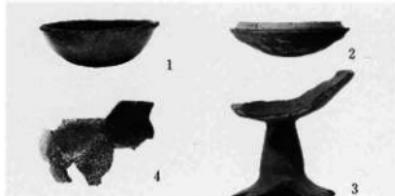
A S B11



A S B 7



A S B 10



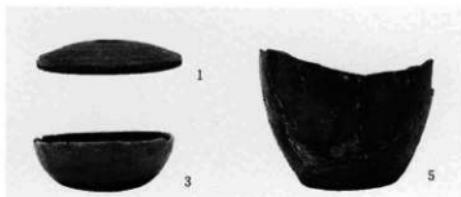
A S B 13



B S B 8



C S B 6



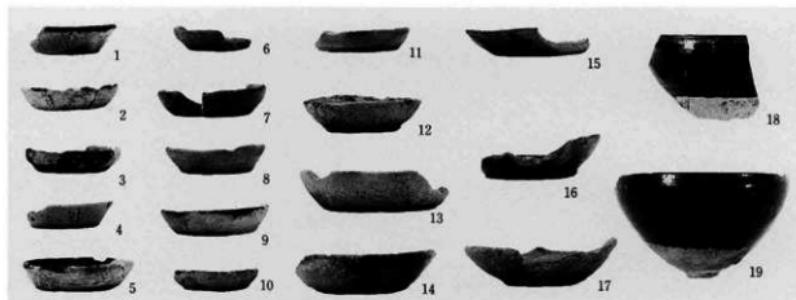
C S B 3



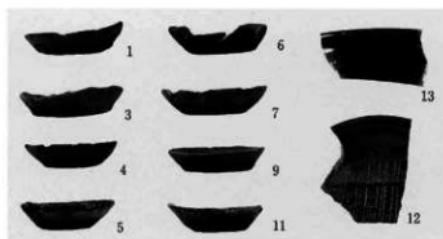
C S B 5



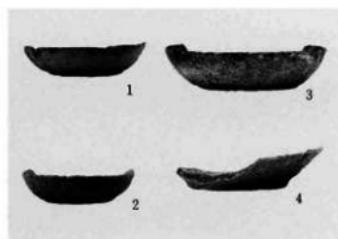
A S X 1



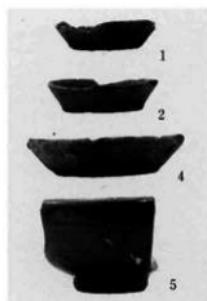
A S X 4



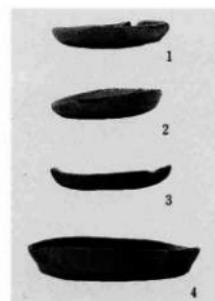
A S X 6



A S X 7



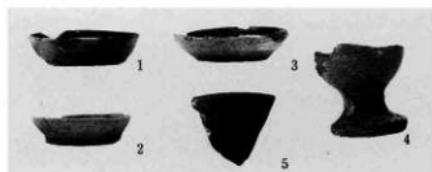
A S K16



A S K23



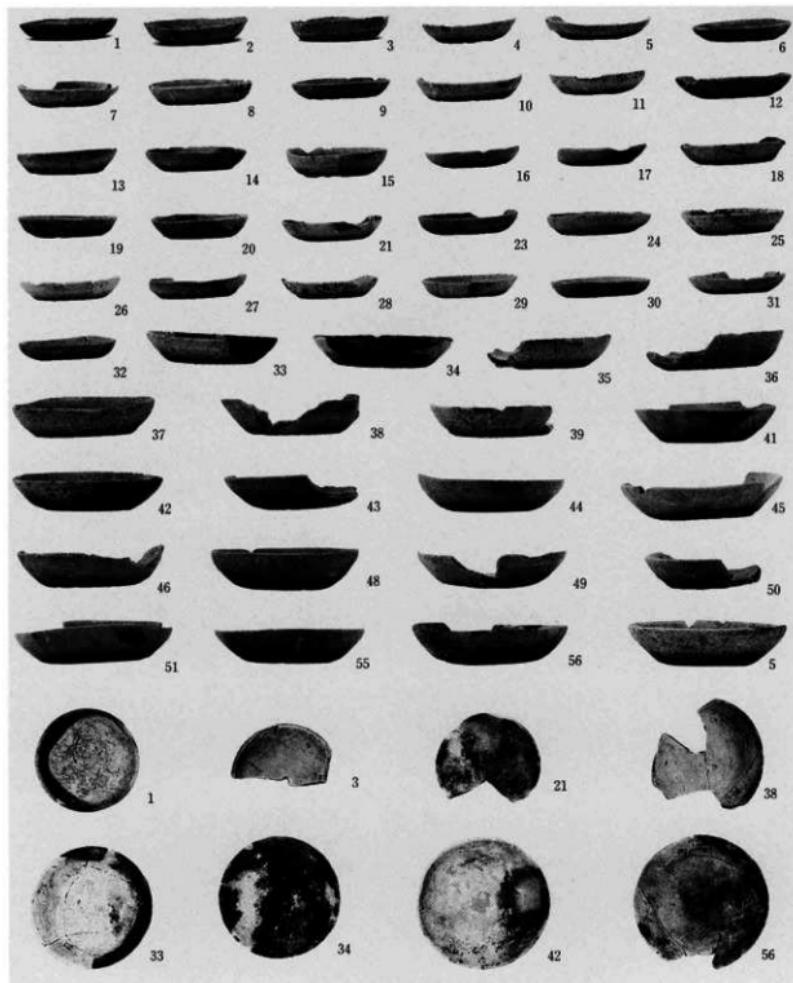
A S K52



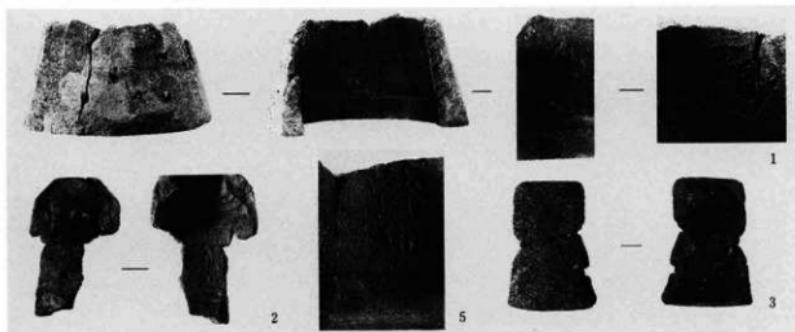
B S K51



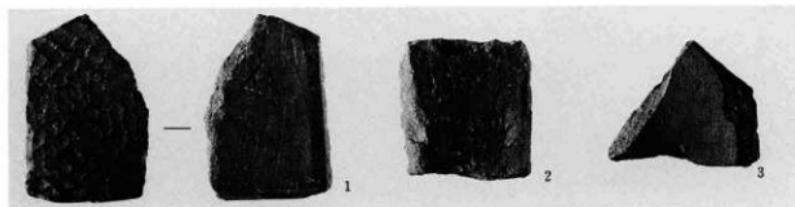
B S B 7



B S K 48 砂鑄型



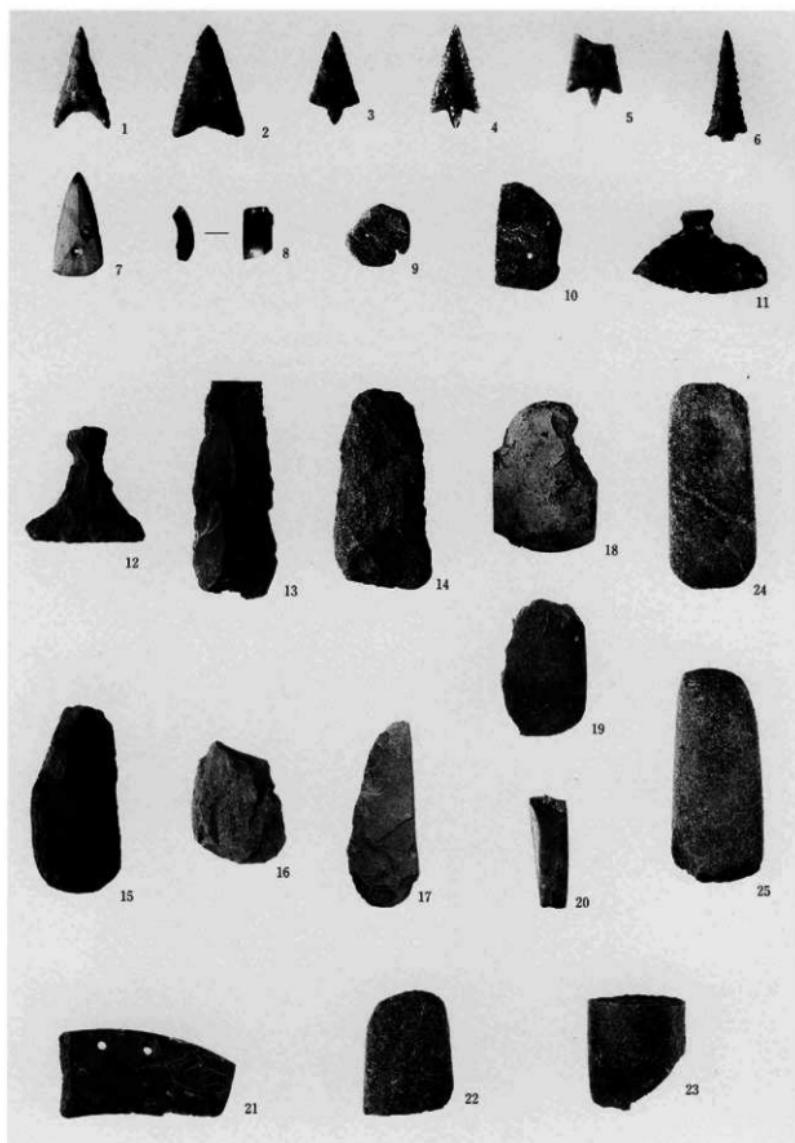
布目瓦



象牙·鹿角·銅·土製品



石器・石製品



V 結語

調査地周辺は初期の裾花川河岸段丘と湯福川扇状地の複合地形で成り立っており、飲料水等の水との関わりの中から古代以前の遺跡が存在しないものと考えられてきた。ところが今回の調査で縄文時代にまで遡る遺構・遺物が発見されたことには驚きをもってむかえた。思い返せば信州大学の裏手には狐池や米間池と呼称される湧水があり、周辺にはこの二つの池を加えて七池が存在する。調査地よりも少し遠いが水には不自由しない地域であり、砂礫堆積物で形成される水はけの良い土壤と南斜面という好適な環境状況を加味した地域でもあった。

調査地において最も古い遺構・遺物は縄文時代中期前半まで遡る。確かなものは住居址1軒・土坑2基であるが、他にC S B 1やB S K 78等の遺構も該期の可能性がある。遺構の分布はB・C区にあり、調査地の西側に限定される。分布がこの地周辺で取まるのか、さらに西方の段丘面に展開しているのか今のところ不明である。A区から後期の所産と考えられる土製耳栓が出土しているが、この時期の遺物では唯一のものである。彫刻施文部に赤色顔料が残存していたり、摩耗がみられないことから近隣に該期の遺跡の存在が予想される。

次に居住域になるのは千年単位の時間をおいた弥生時代中期後半になってからである。A・B区に偏在して住居址2軒が確認されたが、小規模な集落と考えられる。前述した地形立地であり、周辺からは水田可耕地をみいだすことができない。A S B 1の出土遺物からも遺跡の性格を示唆する資料を抽出することができる。貯蔵用の壺の個体数が多いこと、戰闘用と考えられる打製・磨製の石鎌があること、木工具の扁平片刃石斧・大型蛤刃石斧を所持していること、指輪と思われる石製円環が出土していることなど平地の遺跡に比べて内容が豊富である。以上の点を鑑みて単なる農耕集落ではなく、高地性集落的な性格を付与する。しかし、この集落立地は後期の箱清水式期に継続することなく、古墳時代前期まで人影が絶える。

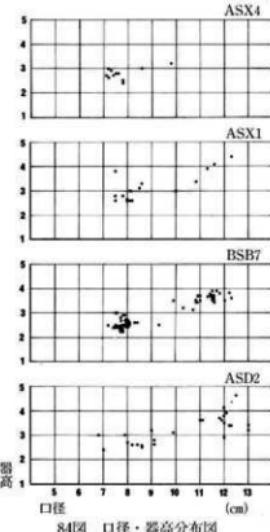
古墳時代の遺構は数を増すものの調査地の東側に偏在する。前期2軒・中期1軒・後期4軒の住居址を確認したが、連続的な縦続性はみられない。すなわち前・中期は前半、後期は後半の時間的位置があたえられる。前期のA S B 11の出土土器群は住居址の埋没過程に投棄されたものとの所見を得ているが、一括資料として取り扱ってさしつかいない。30図20の壺は前代の箱清水式期の系譜を継承しており、新たに器台をはじめS字状口縁台付甕・口縁端部が面取りされる甕等にみられる外米の要素を受け入れた器種が登場する。調整においても赤色塗彩を施すなど前代の影響を残し、甕等におけるハケ状工具の多様性がみられるようになる。土器群の性格は確實に居住施設からの出土品でないことから、祭祀的な意味合いを有するものと考える。中・後期の集落は東町遺跡の調査所見から南東級斜面に展開するようである。特に後期後半に至ると集落範囲は確定されないものの大規模集落が形成された可能性がある。善光寺創建に至る前史として注目されるところであるが、奈良・平安時代の所謂古代に比定される遺構が思いのほか少ない。調査地の西半分の平坦地形に住居址4軒・掘立柱建物址1棟・土坑1基が確認されているにすぎない。この現象をどう理解してよいか今のところ回答を持ち合わせていない。

中世の遺構の分布は中央通りを挟んで東西約200mに展開しているが、遺物の出土状況から善光寺参道に面する大門町に密集する。門前町のにぎわいを示す流通錢としての銭貨の多量出土、町割りや排水機能を有していたと思われる大溝、建物の柱穴を想定させる多数の土坑、地下室と考えられる竪穴状遺構などがみられる。しかし、町屋としての遺構の配置や規模等はみいだすことはできなかった。土器類では土器皿の出土量が多い。中でも比較的多く出土した遺構の土器皿を、縦軸に器高・横軸に口径の法量を分布図にしたのが83図である。器形は大小に大別することができ、B S B 7をみると口径が10cm後半~11cm代・器高が3cm代のものを大とし、口径が2cm代~3cm前半・器高が2cm代のものを小とすることができます。A S X 1は前者と同傾向にある。A S X 4は大型

のものがみられなく、小型品も B S B 7 よりも小振りの法量になる。A S D 2 は長期にわたる機能という遺構の性格からかばらつきがみられるが、分布の集中度をみると B S B 7 よりも大型化しているようである。時代が新しくなるに従い小型化の傾向を重視すれば、A S D 2 → A S X 1 · B S B 7 → A S X 4 の時間的推移が求められる。調整は非ロクロとロクロによるものがあるが、体部のヨコナデや底部内面のナデは共通する。非ロクロ調整のものは底部外面が丸底状になり、ナデ調整で凹凸がみられる。A S K 16 · 27、A S X 4、A S D 2、C S D 1 から出土している。12世紀のロクロから非ロクロ、13世紀から14世紀代に非ロクロからロクロに転換するという。伴出の他の器種をみると、A S X 1 の天目茶碗は14世紀末～15世紀前半、A S X 4 の青磁玉緑碗は15世紀前半・古瀬戸卸皿は14世紀末～15世紀初頭、A S X 7 の青磁碗は15世紀前半、A S K 16 の山茶碗は13世紀後半、A S K 23 の内耳土器は15世紀後半、A S K 52 の古瀬戸仏華瓶は14世紀・龍泉窯系青磁碗は13世紀、A S D 2 の山茶碗皿は13世紀後半・龍泉窯系青磁碗は13世紀・珠洲巣は13世紀・華南産白磁皿は12世紀とそれぞれの年代が与えられる。以上の点を考慮して年代を推定してみる。13世紀後半—A S K 16 · 27（以上土器皿は全て非ロクロ調整）、A S D 2、14世紀—B S B 7、A S K 52、14世紀後半～15世紀前半—A S X 1、A S K 51、15世紀前半—A S X 4 · 7、15世紀後半—A S K 23。ただし、A S X 1 · 4 · 6、A S K 2 · 52、B S B 7 の底部外面には糸切り痕の上に乾燥棚痕跡があり、同じ製作工房、近接する時期の所産と考えられる。

近世に属する遺構も多く検出しているが、度重なる火災による整地および近代以降の建築物、更地化により破壊を受け当初の残存遺構は少ない。中央通り歩道改修工事立会でもみられたが、B S X 3 の石積みに五輪塔部材が転用されている点、門前町の宗教的、歴史的意識変革を象徴する事象として興味深い。

以上、時代を追って特色を記載してきたが、調査歴が少なく誤りを恐れる。東町遺跡の成果所見を待って再考したい。



84図 口径・器高分布図

報告書抄録

ふりがな	ながのいせきぐん にしまちいせき							
書名	長野遺跡群 西町遺跡							
副書名	国道406号（若松町）道路改良事業地點							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第87集							
編集者	青木和明・矢口忠良							
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
長野遺跡群 西町遺跡	長野県長野市 大字長野若松町 字西町1024ほか	20201	C-② C-017	36° 39° 10°	138° 11° 20°	19950724 ～19960920	2,900	国道406号 (若松町)道 路改良事業 (長野県上 本部施行)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
長野遺跡群 西町遺跡	集落跡	绳文	竪穴住居 土坑		縄文土器 石器類 土製耳飾り		中期の集落 遺物包含層	
		弥生	竪穴住居		弥生土器 石器類 石環 土製品		中期葉式期の集落	
		古墳	竪穴住居		土師器 須恵器 滑石製模造品		前期から後期の集落	
		奈良	竪穴住居 土坑(掘立柱建物)		土師器 須恵器			
		平安	竪穴住居 土坑		土師器 須恵器 綠釉陶器 瓦			
		中世	建物(地下施設) 土坑 潟		陶磁器 土器 錢 その他各種		善光寺門前町	
		近世	建物(地下施設) 土坑		陶磁器 土器 錢 その他各種		善光寺門前町	

長野市の埋蔵文化財第87集

長野遺跡群

西町遺跡

平成10年3月24日 印刷

平成10年3月31日 発行

編集 長野市教育委員会

発行 埋蔵文化財センター

印刷 信毎書籍印刷株式会社